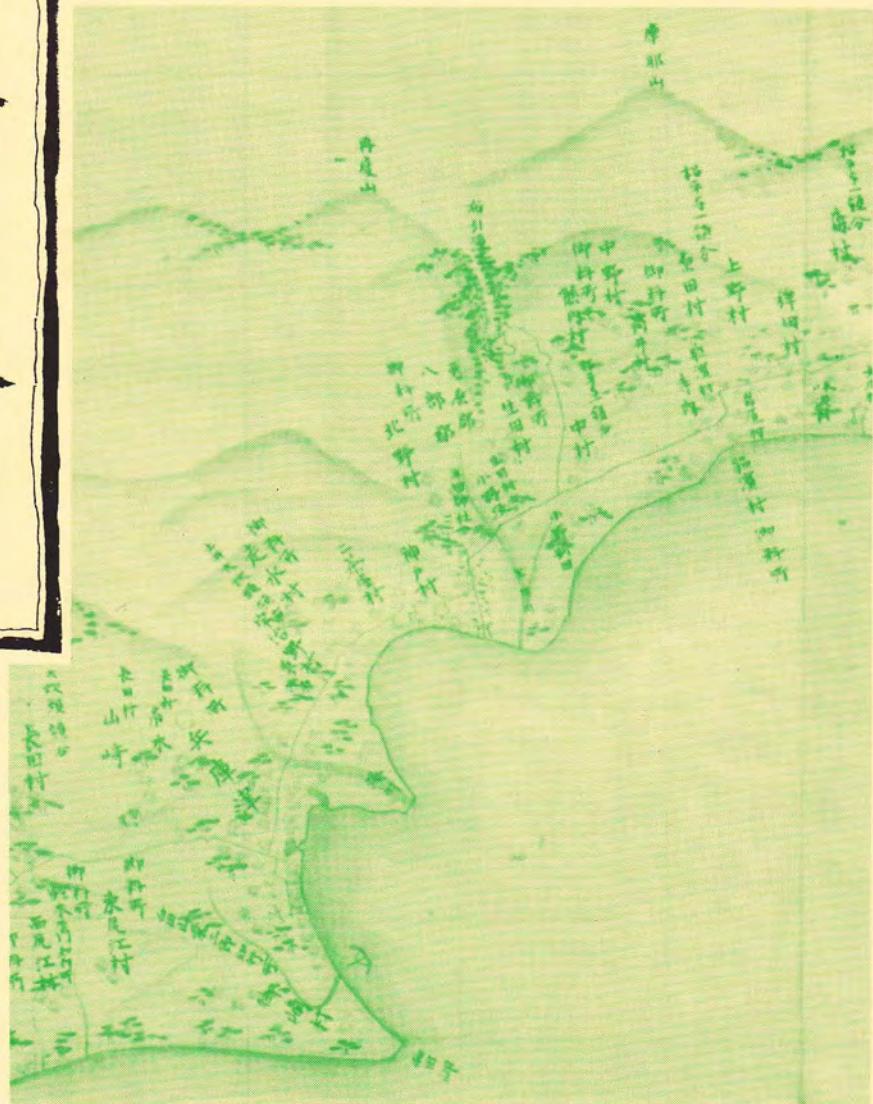


伊能忠敬研究

史料と伊能図



二〇〇四年 第三六号

伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵

伊能大図第一三七号「神戸」部分

山陽道の測線は布引瀬に寄り、生田明神の参道に出て海岸まで通り抜け、もどつて神戸村から兵庫津へと進む。この辺りが現在の神戸中心部で、当時は御料所（幕府領）だった。灘の大石村では造酒家おおく繁昌と見えると記す。翌日は麻耶山に登り、広嚴寺に立寄り楠子の書を見学、楠公碑の前にて山々を測る。須磨寺では靈宝を見である。

兵庫津には宿場の合印である○印と緯度観測をした☆印、港湾マークの帆掛け舟が赤色で描かれている。

現在、神戸市中央区京町にある神戸市立博物館では「伊能忠敬の日本地図展」が開催され、アメリカより里帰りの大図は近畿、中国、四国が描かれた第一二五号、一三四号、一三五号、一三七号、一三八号、一四二号、一四五号、一四六号の八舗が公開されている。ワシントンから三年の歳月に感慨ひとしおである。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

(渡辺)

最新情報

伊能図から世界規模で相互理解を

本年度活動計画について

開幕アメリカ伊能大図展、釧路で全国展示

アメリカ伊能大図一覧

伊能中図の修復完了

話題

スワヒリ語で紹介された忠敬さん

もし実現していたら忠敬と伊藤真一氏ー

忠敬を詠む(一)

伊能忠敬の持病薬

記念館収蔵品展

古都サイエンスの旅(読売テレビから)

芳名録より

伊能忠敬翁の偉績を偲びて

研究ノート

伊能古文書教室『旌門金鏡類録』(二)

和算の番付表から

伊能忠敬書簡紹介(一)「大川治兵衛宛」

待望の未公開忠敬書簡

伊能陽子 伊藤栄子 安藤由紀子 渡辺一郎

地域史料紹介

糸魚川事件始末

伊能忠誨日記(五)、忠誨自筆書、先触

エッセー

三六日で世界一周(二)

忠敬談話室だより

エベール氏

渡辺一郎

北海道新聞編集部

京都新聞編集部

三五六四三一

渡部健三

武田威一

伊能洋二

佐久間達夫

伊能記念館

伊能陽子

名井九介

小島一仁

伊藤栄子

安藤由紀子

白井良作

佐久間達夫

四三五〇

渡辺一郎

五六九

編集部

六四

伊能図から世界規模で相互理解を

米国議会図書館・エベール博士

御礼申し上げます。アメリカ伊能大図展開催にご尽力いただいた、伊能忠敬研究会の渡辺代表理事、日本地図センターの野々村理事長そして米国議会図書館アジア部門に所属し今回の一連の企画の熱心な協力者であるタッド・オオタ氏、更にこの度の大規模で実に価値あるプロジェクト推進に対して、たゆまぬ献身的なご努力を頂いた多くの方々にも敬意を表したいと存じます。

世界遺産に等しい伊能図の発見！

日本の偉大な地図製作者伊能忠敬を永年に亘りご研究になさつてゐる「伊能忠敬研究会」の渡辺代表理事によりまして、二〇〇一年の春、米国議会図書館で殆ど完全に近い伊能大図の写本が、偶然にも発見されるという大変感動的な出来事が御座いました。

伊能大図二一四枚の内、實に二〇七枚にも上る日本地図が米国議会図書館の地理・地図部に所蔵されていた訳です。これを元に、一九世紀初頭に於ける日本で最も完璧で詳細な地図と、並々ならぬ努力を傾注してその地図を作成した伊能忠敬の歴史と共に明らかにするプロジェクトが発足しました。渡辺氏による日本及び世界の遺産に等しい伊能図発見の感動は、現在においても日本国内のみならず米国議会図書館に於いても息づいております。

伊能大図発見後三年間の経緯にも特筆すべき進展があつたと思ひます。国際協力を通じて、これから世代の人々が日本を理解する為に伊能の顕著な貢献の物語を知る事が出来るのみならず、伊能の貢献により創り出された産物を実際に閲覧し、より深く学ぶ事が出来る様になりました。この様な素晴らしい発見とその後の展開に関わる事が出来、大変嬉しい光栄に存じます。更にお互いの努力を傾注しより多くの資料と知識を共有する事を期待しております。

ここに、伊能大図のスキャンするため修復保全にご尽力頂きました星埜前国土地理院長はじめ、小出測図部長、畠山前技術専門員そして、日本地図センターの大竹前理事長、前野理事に深く感謝申し上げますと共に、渡辺国土地理院長ほか職員の皆様の温かいご支援、そして展示会の準備に当たり絶大なご協力を頂いた共同通信社木村氏にも厚く

伊能忠敬の大図がどの様な経緯で米国議会図書館の地理・地図部に納入されたか、その真相は未だ定かではありません。ただ、米国議会図書館に於いては、地図を機械で読み取る方式を始めたばかりの一九七〇年代の初めに、伊能大図一式を目録登録した事は判明しております。

す。我々は二一四枚の内の二〇七枚の伊能大図写本を保管していることに慶びを感じております。二〇〇一年以来、日本地図センターのご好意により、大図が作成されたと同時期、即ち一八〇〇—一八二二年の間に、伊能忠敬が作成した小図及び中図の複製日本地図をファクシミリコピー（複製）で頂戴しました。

伊能図にさざなる探求を！

皆様ご存知の様に、伊能大図の実物は一八七三年の皇居火災で焼失され、存在していません。しかしながら、一九世紀に伊能大図の写しが四部作成された事は判明しております。そして、米国議会図書館所蔵の伊能大図写本が唯一完全に近い形である様に思えます。又、米国議会図書館には一九世紀後半の一八九〇年代に、一八九三年のシカゴ世界博で展示されたと思われる伊能図数点を寄贈されております。いずれにしても、現在米国議会図書館所蔵の伊能大図の出所や搬入経緯については、さらなる研究が必要とされています。

尚、今回の伊能図展示会に際して寄せられた、皆様方のご協力とご支援を心から感謝申し上げます。又、展示会場となる神戸市立博物館、仙台市立博物館、熱海博物館、そして徳川美術博物館の関係各位にも厚く御礼申し上げます。

遺産のデジタル化は世界共有情報！

伊能地図のカタログが発行された事は喜ばしく、展示会を通じて伊能の偉業は我々の記憶に生き続けるでしょうし、そして国土地理院並びに日本地図センターと米国議会図書館が日本及び国際的にも貴重な遺産をデジタル化し、インターネットを通じて実用的研究に供する事

により、伊能の事業を再び現代に復活出来た事は誠に慶賀に存じます。

私は今回、この様に重要な国際協力事業の推進に当たり、こうして皆様方にご挨拶出来る機会を与えられた事を、大変な名誉と、光栄に存じます。

今回のプロジェクトが、今後さらに地図製作に関する貴重な情報やデーター交換を促進し、そして我々の住む世界をより正しく認識する為にも、世界規模で貢献できる相互理解を醸成する事に繋がる様祈念しながら、私のご挨拶と致します。

2004・4・14

Dr. John R. Hebert

米国議会図書館 地理・地図部長

（神戸展開会セレモニーでの挨拶から）



本年度活動計画について 代表理事 渡辺一郎

今年は四月からアメリカ大図、フランス中図、ならびに東京大学の中図を中心とする巡回展は「伊能忠敬と日本図」と銘打つて全国各地で開催されます。記念誌は「アメリカにあつた伊能大図とフランスの伊能中図」として日本地図センターで制作されました。編集委員長は鈴木純子さん、編集委員は渡辺一郎、清水靖夫、長岡正利の各会員です。

ペイレさんの中図は破損部の修理を済ませ、二月から三月にかけてデジタル撮影をおこないました。二億画素、露出時間二七分という超精密撮影装置で全図の入力を行いました。三月一五日に修理完了の記者発表があり、一六日の関西では読売、毎日、京都新聞などで報道されました。アメリカからは、大図の実物三二枚が到着し、四月十日に国土地理院の貴重書室に入庫されました。

本会としては、今年は展覧会を成功させるために格段の努力をいたしましたくご支援をよろしくお願ひいたします。

また、本会は今年で創立十周年となります。振り返りますと、九五年に佐原で三日間だけ開いたフランス中図展をキッカケに、何もない平地に研究会の旗を立て、有志を糾合してから、会報の発行、江戸博展開催、伊能ウオーカー催行、八幡宮に忠敬銅像の建立、東京国立博で伊能忠敬展、アメリカ大図とフランス中図の巡回展と、ただひたすらに、前進してまいりました。

この間、俳優座の演劇があり、映画もありました。NHKが「お正月時代劇」で取り上げ、有力な歴史番組の「そのとき歴史が動いた」「ときめき歴史館」でも放映され、民放でも多数取り上げていただき

ました。新聞、雑誌でも数え切れないくらい登場しております。
また、江戸博の図録とアメリカ大図展の図録の制作には、研究会として深くかかわっております。

これまでの活動は、補助金も貰わず、資金が無くて、人手もない趣味グループの実績としては、見事な成果であったと考えております。

さて、ここで今年の予定をお知らせいたしておきます。

来年以降をどうするかにつきましては皆様とじっくりご相談いただければと考えております。今後の会運営等に忌憚のない御意向をお待ちいたします。

展覧会の日程は次頁のとおりです。前号に多少変更追加があります。
研究会の行事は旅行会と記念大会を予定しております。

・旅行会 7月15日から17日 北海道道東・釧路、西別方面

別海町西別に「伊能測量最東端記念碑」建立の計画があり、建立記念式典と植樹に参加を予定しています。

釧路ではアメリカ大図の全国版が初めて展示されます。テーブルカットなどセレモニー参加と展覧会を観覧します。ほかに忠敬、林蔵の足跡に触れます。(詳細は本誌同封のお知らせをご覧下さい)

・創立十周年記念大会

十一月頃を予定しています。

日時、会場、内容は別途ご連絡申し上げます。

*夫々に「研究会」との出会いがあります。お便りをお待ちします。

いよいよ開幕「アメリカ伊能大図里帰り展」

待望の「アメリカ大図」と修復された「フランス・ペイレ中図」が四月十七日から五月二三日まで神戸市立博物館で開かれます。前号でご案内しましたように、来春まで全国を廻ります。是非どこかで、この豪華、端麗、雄大な平成の伊能図をご堪能下さい。

その後に追加開催が決まったものがあります。

開催日程

□「アメリカより里帰りの大図初公開『伊能忠敬の日本地図』展」

- ① 4月 17日～5月 23日 神戸市立博物館
- ② 6月 4日～7月 19日 仙台市科学館
- ③ 7月 30日～9月 5日 M O A 美術館（熱海市）
- ④ 10月 2日～11月 7日 徳川美術館（名古屋市）
- ⑤ 6月 13日～7月 19日 仙台市博物館
- ⑥ 7月 23日～7月 25日 札幌市中央体育館
- ⑦ 7月 30日～9月 5日 帯広市十勝プラザ
- ⑧ 8月 21日～8月 25日 M O A 美術館（熱海市）
- ⑨ 10月 11日～10月 24日* 広島県立美術館（広島市）

⑩ 10月 30日～10月 31日

ナゴヤドーム【全国展示】

⑪ 11月 1日～11月 7日

徳川美術館（名古屋市）

⑫ 11月 9日～11月 16日

武蔵大学（東京都）

⑬ 11月 19日～11月 23日

新潟県立自然科學館（新潟市）

⑭ 11月 26日～11月 28日

福岡市立少年科学文化会館

⑮ 12月 予定

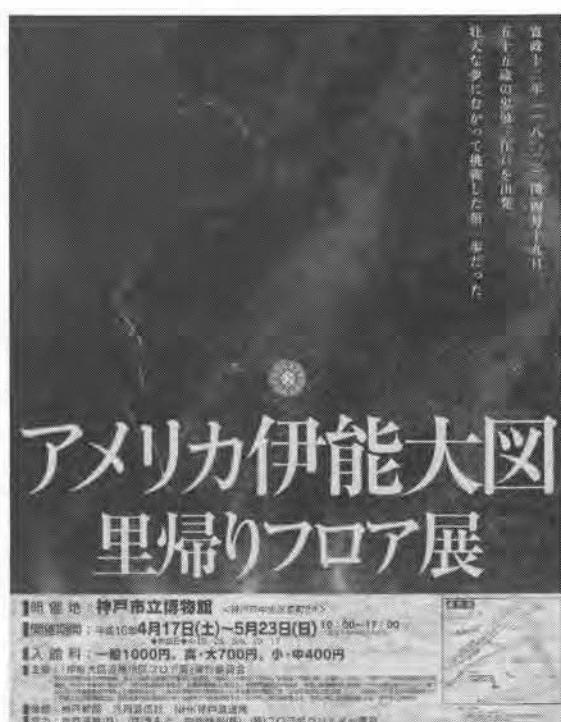
日本大学文理学部（東京都）

⑯ 平成 17年 1月 22日～1月 23日 予定

幕張メッセアリーナ（千葉市）【全国展示】

⑰ 平成 17年 2月 予定

佐原市（千葉県）



註・この期間内の1週間

【北海道新聞 三月二二日夕刊】

伊能忠敬「大図」七月道内で公開 銚路は国内初「全国」展示

米国議会図書館で二〇〇一年に見つかった、江戸時代後期の測量家伊能忠敬による「精密な日本地図『大図（大図）』」の複製展示会が、七月十六～十九日の銚路を皮切りに札幌と帯広で開かれる。日本列島全体の展示は銚路と名古屋（十月）だけとなる。（幕張が追加予定）

銚路の展示会は、同市内の郷土史愛好者らが実行委員会を組織して主催し、銚路市観光国際交流センターで開く。大図は、全二百四十四枚中の二百七枚。一枚が疊一枚分の大きさで、すべてを並べるには縦横六十枚、三十枚が必要となる。

銚路会場では、北海道を能登半島の上の日本海部分に移し、全国分を大ホールの床に展示。上に透明のビニールを敷き、見学者は地図上を自由に歩くことができる。



大図展図録・カラー印刷 184頁

北海道関連では稚内周辺の一枚が行方不明。桧山管内と奥尻島の二枚は〇二年に国立歴史民俗博物館（千葉県）で見つかったが、今回は米国発見分のみを展示する。

展示会は、銚路も含め全国十六カ所。銚路と名古屋ドーム以外は開催地域分だけの展示になる。



発見当時のアメリカ大図・撮影渡辺一郎

アメリカ伊能大図一覧

アメリカ大図のリストは以前にも掲載しましたが見易い形にした決定版がまとまりましたので紹介します。編集には鈴木純子さんと日本地図センターの国川三千代さんに多大の労を煩わせました。

(『アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図』アメリカ伊能大図展実行委員会編より転載)

番号	図名	大きさ (cm)	記載内容
1	色丹島	102.3 × 177.7	遠景のみ
2	古釜布	102.7 167.9	古釜布 秩別
3	国後島	104.4 177.2	東沸 ケムライ岬
4	羅臼川	104.6 139.4	
5	標準	177.2 102.3	忠類 尾岱沼
6	根室 西別	101.9 177.5	落石 花咲 納沙布岬 温根沼
7	網走	102.1 197.9	斜里 藻琴湖
8	常呂	101.5 174.0	湧別 コムケ湖
9	紋別	177.6 109.2	渚滑 沙留 興部
10	枝幸	177.4 101.3	雄武 幌内
11	頓別	170.3 102.1	猿払 鬼志別
12		欠 図	
13	天塩	180.5 102.2	稚咲内
14	利尻島 礼文島	180.2 101.5	
15	焼尻島 天売島	104.7 142.4	遠別
16	留萌	177.1 101.9	羽幌 苦前
17	増毛	175.0 102.0	安瀬
18	江別	101.1 117.4	幌向
19	夕張岳	102.9 175.2	遠景のみ
20	小樽	100.5 194.5	古平 神威岬
21	岩内	155.0 104.5	泊 黒松内 寿都 尻別川
22	厚岸	101.5 170.2	昆布森
23	釧路	102.2 174.8	大楽毛 白糠
24	十勝川	154.5 103.9	湧洞沼
25	襟裳岬	165.1 102.6	広尾
26	様似	102.2 178.2	浦河 三石 静内
27	鶴川	102.3 182.0	新冠 門別
28	白老 勇払	175.5 102.0	社台 樽前山
29	室蘭	169.6 102.5	アヨロ 鷺別
30	長万部	103.0 167.6	虻田 礼文華 国縫 有珠山
31	駒ヶ岳 (内浦岳)	102.8 147.1	鷺の木 落部 遊落部
32	函館	104.0 162.5	亀田 当別 木古内 大沼
33	泊	192.2 103.1	須築 太櫓
34		欠 図	
35		欠 図	
36	蝦夷 松前	103.6 160.0	福島
37	大島 小島	99.8 156.8	遠景のみ
38	陸奥 三厩 竜飛岬 十三潟	183.0 101.8	今別 小泊 鮎澤

39	陸奥 津軽之内 九艘泊 小湊	182.2	104.5	平館 蟹田 蓬田 青森
40	陸奥 津軽之内 野辺地 倉内沼	176.1	110.9	田名部 川内 横浜 釜臥山
41	陸奥 外南部之内 佐井 大畑	104.2	159.2	大間 下風呂 尻谷
42	陸奥 津軽之内 八甲田山	108.6	105.5	遠景のみ
43	陸奥 弘前 出羽 秋田郡	135.9	108.7	浪岡 大鰐 碇ヶ関 矢立峠
44	陸奥 北郡 三戸郡	134.2	110.7	七戸 三本木 五戸 三戸
45	陸奥 久慈濱	183.2	103.2	種差 野田 普代
46	陸奥 宮古	177.8	110.0	田野畑 田老 山田 船越
47	陸奥 大槌 気仙沼	174.1	111.5	釜石 大船渡 高田
48	陸奥 十三濱 金花山	174.5	104.2	志津川 雄勝 女川 石巻 北上川
49	陸奥 福岡	173.8	108.6	一戸 沼宮内 渋民
50	陸奥 盛岡	177.1	105.0	日詰 石鳥谷 花巻 鬼柳
51	陸奥 一関 駒ヶ岳	181.3	103.5	築館 水沢
52	陸奥 松島 仙台	176.4	113.0	古川 塩釜 岩沼
53	陸奥 白石 中村	107.8	163.3	大河原 荒浜 桑折
54	陸奥 行方郡 標葉郡	157.0	104.8	島崎 毛萱
55	陸奥 小名濱 常陸 平潟湊	176.9	105.5	下北迫 四倉 勿来関
56	陸奥 福島 二本松	177.9	104.9	本宮 郡山 須賀川
57	常陸 那珂湊	178.5	105.0	高萩 助川 磯浜
58	常陸 下緋 銚子湊	182.8	103.8	汲上 飯岡 犬吠埼
59	陸奥 深浦 出羽	179.2	103.6	赤石 岩崎 八森 舶作
60	出羽 大館 能代	104.5	190.5	綾子 切石 米代川
61	出羽 大平山	103.8	106.0	森吉山・遠景のみ
62	出羽 八郎潟 久保田	104.2	130.7	戸賀 大川 船川 土崎 寒風山 一ノ目潟
63	出羽 本庄 厨川	103.1	163.1	仁井田 刈和野 大曲 六郷 金澤
64	出羽 横手 象潟 鳥海山	103.3	181.1	平沢 金浦 湯沢 横堀
65	出羽 新庄 月山	167.2	112.9	及位 金山 舟形 尾花沢
66	出羽 山形 上ノ山 笹谷峠	148.2	104.5	楯岡 宮崎 天童 赤湯 藏王山
67	陸奥 若松 出羽 米沢	175.8	102.2	糠野目 大塩 赤井 原 磐梯山
68	下野 那須山 陸奥 白川	154.8	99.0	赤津 勢至堂 長沼 矢吹 芦野
69	下野 大田原 宇都宮	173.6	99.9	喜連川 氏家 小金井 那珂川 鬼怒川
70	出羽 酒田	182.8	101.7	吹浦 湯濱 飛島
71	越後 出羽 鼠ヶ関	103.5	147.4	三瀬 浜温海 笹川 栗島
72	越後 村上	178.4	100.4	桑川 瀬波 岩舟 塩谷 飯豊山
73	越後 新潟	148.8	101.2	村松 信濃川 阿賀野川
74	越後 寺泊 出雲崎 舞板	136.6	69.7	寺泊 地蔵堂 出雲崎 弥彦山
75	佐渡	97.2	178.1	湊 相川 河原田 小木 金北山
76	越後 長岡 椎谷	102.9	190.0	小千谷 堀之内 柏崎 姉崎
77	越後 六日町	120.4	107.6	浦佐 湯沢 駒ヶ岳 八海山
78	下野 日光山	104.1	177.1	中山 渋川 赤城山 利根川
79	下野・越後 三国峠	105.9	136.7	猿ヶ京 須川
80	越後 糸魚川 高田	105.4	176.4	直江津 能生 外波 関山 妙高山
81	越後 黒姫山 信濃 飯山 松代	124.0	103.0	中野 須坂 柏原 野尻湖
82	越後 親不知 越中 立山	168.6	103.3	泊 魚津 滑川 黒部川
83	能登南界 加賀北界 越中 富山	102.2	183.2	伏木 氷見 柴垣 羽咋 高松

84	越中 能登 能登島	104.8	177.5	和倉 黒島 福浦
85	能登 金剛崎 輪島湊	103.6	180.6	飯田 宇出津 皆月
86	加賀 金澤 宮腰	105.7	136.9	安宅 橋立
87	武藏 岩槻 下総 古河 下野	174.9	104.3	小山 越谷 草加 城ヶ谷 筑波山
88	武藏 忍 川越	176.0	104.5	岩槻 熊谷 浦和 蕨
89	上総 五井 東海岸 下総 行徳	103.3	162.0	蓮沼 船橋 千葉
90	相模 相模野 下総 武藏 江戸	103.6	178.4	川口 川崎 大和田 八王子 小仏
91	上総 大東岬 富津岬	104.8	177.3	木更津 姉崎 鹿野山
92	安房 小湊 勝山 上総	106.5	186.5	勝浦 前原 北条 野嶋崎 鋸山
93	武藏 神奈川 相模 馬入川	131.5	110.0	横浜 横須賀 鎌倉 藤沢 厚木 江の島
94	武藏 秩父 上野 高崎	173.7	103.6	深谷 本庄 小川 皆野
95	信濃 上田 上野 安中 硯冰峠	104.5	175.5	富岡 軽井沢 小諸 上田 浅間山
96	信濃 塩尻峠 松本 諏訪湖	166.6	104.4	和田 岡谷 麻績
97	相模 津久井県	105.6	150.6	石和 大月 上野原 河口湖
98	信濃 東境	146.4	104.3	葛木 白州 茅崎 市川大門 鰐沢
99	駿河 伊豆 相模 小田原 大山	108.7	99.8	平塚 伊勢原 箱根 芦ノ湖 足柄峠
100	駿河 大宮 甲斐	103.5	178.5	上吉田 御殿場 佐野 身延 富士山
101	伊豆 天城峠 真鶴岬 沼津	100.9	155.8	熱海 三島 土肥 吉原
102	伊豆 大島 利島	104.6	186.9	熱川 下田 松崎 三原山
103	伊豆 新島 神津島	128.7	103.9	鵜渡根 池内 式根島
104	伊豆 三宅島 御蔵島	103.3	150.1	阿子 坪田
105	伊豆 八丈島 小島	177.3	103.7	
106	伊豆 青ヶ島	160.2	102.5	遠景のみ
107				欠 図
108	三河 凰来寺 美濃 笛木 岩村 信濃南境	163.6	104.3	金沢 松島 飯島 地蔵岳 (表書は 110 号)
109	飛騨 美濃 信濃 福島	185.2	102.6	奈良井 上松 妻籠 御岳 駒ヶ岳 乗鞍岳
110	信濃 根羽村 馬籠	198.0	103.7	苗木 中津川 駒場 新城 恵那山 (表書は 108 号)
111	遠參 大井川 浜名湖	115.8	197.5	島田 掛川 浜松
112	飛騨 高山	145.9	103.7	古川 小坂 上呂
113	飛騨 美濃 八幡	104.4	155.0	中切 萩原 下呂 金山 下洞
114	尾張 犬山 美濃 吉田	105.0	165.3	大湫 御嵩 太田 関 小牧 一宮
115	三河 刈屋 岡崎 挙母 名護屋	104.2	166.4	明川 足助 熱田
116	三河 吉田 田原 西尾 知多郡	106.5	179.3	二川 御油 半田 常滑 伊良湖 師崎
117	志摩 伊勢 大湊	143.7	96.8	鳥羽 波切 五ヶ所浦
118	近江 伊勢 尾張 美濃 大垣	151.4	105.5	笠松 津島 垂井 関が原 木曾川
119	加賀 白山	103.0	133.0	遠景のみ
120	越前 福井 加賀 大聖寺	177.3	109.3	三国 蒲生 河野
121	近江 餘吾湖 若狭 小濱 敦賀	105.5	182.0	高月 海津 三方 竹生島
122	丹後 田邊 若狭	126.0	105.8	高浜 平田 由良 鋸崎
123	但馬 丹後 宮津	123.0	105.0	間人 出合 久美浜 天橋立
124	因幡 鳥取 但馬 出石	104.8	168.8	豊岡 香住 余部 浜坂
125	近江 琵琶湖	104.0	122.6	長浜 米原 八日市 八幡 今津
126	近江 山城 丹波 北境	104.8	147.2	木戸 雄琴 殿田

127	丹波 福知山 但馬 丹後	103.4	129.7	綾部 千束 河守 柏原
128	播磨 美作 因幡 但馬	105.6	168.0	養父市場 和田山 竹田 古町
129	近江 水口 伊勢 桑名 亀山	100.0	181.2	四日市 関 加太 日野 御在所山
130	伊賀・伊勢 津	108.2	131.1	斎宮 松坂 久居 平田
131	伊勢・紀伊 南海岸	103.0	153.5	神前浦 長島 引本浦 尾鷲
132	新宮 那智山	179.1	103.6	鵜殿 新宮 勝浦 太地
133		欠 図		
134	伊賀 上野 大和郡山 吉野	147.0	102.8	名張 木津 奈良 櫻井
135	大坂 尼崎	153.0	97.5	守口 天王寺 尼崎 信貴山 法隆寺
136	幡磨 摂津 三田 丹波 篠山	102.8	146.4	福住 中山寺 三木 小野
137	和泉 岸和田 播磨 明石 淡路	112.7	157.3	西宮 神戸 兵庫
138	淡路 洲本 紀伊 和賀山 和泉	102.4	149.0	鶴原 塩津 加太 由良
139	紀伊 日御碕	129.8	103.1	印南 湯浅 由良
140	紀伊 串本	102.5	155.2	古座 日置 田邊 大島
141	幡磨 姫路	162.0	107.2	加古川 高砂 相生 龍野
142	阿波 徳島 淡路 洲崎	175.3	103.5	湊 福良 鳴門 吉野川
143	伯耆 因幡 鳥取 美作	160.2	105.5	用瀬 智頭 千代川 湖山池 東郷湖
144	備前 播磨 美作 津山	104.0	155.0	佐用 周匝 三石 和氣 金川
145	讃岐 小豆島 備中 備前 播磨	102.3	162.6	土庄 日生 牛窓 長船 宇野 玉島 旭
146	讃岐 高松 阿波	102.1	162.2	三本松 津田 志度 屋島
147	阿波 東海岸	103.5	157.8	小松島 椿泊 由岐 日和佐
148	土佐	146.6	103.0	牟岐 室津 (表書は149号)
149	土佐 阿波	146.3	102.4	奈半利 田野 安芸 (表書は148号)
150	備中 美作 勝山 伯耆	201.5	103.7	倉吉 久世 新見 大山寺
151	讃岐 丸亀 備中 松山 備前 岐島	197.2	103.8	坂出 倉敷 足守 笠岡 井原
152	土佐 伊豫 讃岐 金毘羅	181.8	102.3	観音寺 川之江 立川 本山
153	隱岐 島後	149.4	105.8	
154	隱岐 島前	103.7	143.4	
155	出雲 松江 伯耆 米子	127.7	101.8	日吉津 岸本 母里 広瀬 日野川 大根島
156	備中・備後 内地	180.0	102.5	高山 柚木 上下
157		欠 図		
158	伊豫 西条	113.5	103.6	藤原 阿島 小松
159	土佐 高知	142.9	103.1	赤岡 浦戸 宇佐 仁淀川
160	土佐 西部	154.0	104.2	須崎 久礼 興津
161	伊豫 宿毛 土佐	104.7	180.5	四万十川 足摺岬 沖ノ島
162	出雲 宍道湖	149.9	104.2	木次 今市 大社 (宍道湖を完道湖と表示)
163	出雲 石見 備後 安芸 内地	174.9	103.4	比和 吉舎 三次 赤名 吉田
164		欠 図		
165	石見 出雲 日御碕	124.6	101.4	多岐 大田 大森
166	安芸・石見 内地	181.4	104.4	温泉津 有田 加計
167	伊豫 諸島 安芸 広島	181.8	103.4	吳 府中 海田市 江田島 倉橋島
168	伊豫 松山	104.4	132.0	河原津 北条 上灘
169	伊豫 怒和島 周防大島	104.6	177.5	柳井 上関 室津 平群島

170	伊豫 大洲	103.8	183.8	長浜 八幡浜 津布理
171	伊豫 宇和島	103.7	147.2	高山 高田 柏 日振島
172	安芸 石見 濱田	186.4	102.2	有福 波子 津田 筒賀
173	周防 岩国 石見 安芸	168.6	103.7	須万 呼坂 由宇
174	長門 石見	104.8	188.5	益田 青原 須佐 相島 見島
175	周防 徳山 長門 津和野	182.9	104.5	下松 鹿野 三田尻
176	周防 山口 長門 萩	182.2	103.8	小郡 宇部 秋吉 青海島
177	長門 長府	157.8	90.4	田部 新別名 小串
178	筑前 豊前 小倉 長門 赤間関	141.5	104.2	門司 香春 添田 後藤寺
179	豊前 中津 豊後 姫島	100.8	162.7	高田 宇佐 青
180	肥後 筑後 筑前 豊後 内地	161.4	100.0	柿坂 森 宮原 宝珠山
181	豊後 杵築 日出 府内	101.4	178.6	関 佐志宇 別府
182	肥後 豊後 岡	102.0	154.0	犬飼 竹田 久住 高森
183	豊後 白杵 佐伯 日向	179.6	102.5	津久見 島浦島
184	日向 延岡	130.4	102.5	北方 美々津 山陰 神門
185	肥後 日向 佐土原 高鍋	181.2	103.0	都農 折生迫 本庄
186	筑前 宗像 八幡	99.5	119.0	黒崎 直方 芦屋 津屋崎 新宮
187	筑後 肥前 筑前 福岡 秋月	103.0	155.9	飯塚 甘木 宰府 三瀬
188	肥前 佐嘉 筑後 久留米 柳河	101.5	156.6	吉井 羽犬塚 川上
189	肥前 唐津 筑前	110.1	176.7	前原 呼子 馬渡島 鷹島 福島
190	肥前 岡村	94.5	177.6	武雄 伊万里 江迎 佐世保
191	壱岐	98.0	76.0	芦辺 勝本
192	対馬	208.4	102.7	鶴知
193	脂後 熊本 筑後	104.4	184.8	隈府 関 高瀬 大牟田 荒尾
194	日向 肥後	104.0	138.4	岩戸 河内 馬見原
195	肥後 八代	102.8	123.2	御船 松橋 宇土
196	肥後 天草 肥前 島原	142.0	77.2	三角 大矢野島 戸駆島
197	大隅 日向 霧島山 肥後	178.5	104.5	湯前 免田 飯野 韓国岳
198	日向 飫肥	130.5	76.1	小内海 油津 崎田 都井岬
199	日向・大隅 外海岸	170.8	104.6	西方 志布志 内之浦 牛の崎
200	薩摩 肥後 人吉	104.5	151.2	坂本 日奈久 田浦 津奈木
201	肥前 大村	76.7	179.4	浜町 彼杵 瀬戸
202	肥前 長崎	103.7	148.1	小浜 謙早 時津 野母岬
203	薩摩 長崎 肥後 天草	147.0	99.2	亀川 高浜 牛深 獅子島
204	肥前 平戸	161.3	85.4	長串 平戸島
205	肥前 五島之内・平島 江ノ島	60.3	96.1	
206	肥前 五島北島	146.9	97.9	有川 宇久島 小值賀島 奈留島
207	肥前 五島本島	88.4	135.0	福江 富江 三井樂 久賀島
208	大隅 日向 薩摩 肥後	106.0	196.3	中津川 大口 阿久根 川内川
209	薩摩 鹿児島 大隅 桜島	183.9	102.4	鹿屋 古江 加治木 岩本
210	薩摩 西南端	186.6	101.5	枕崎 野間岬
211	大隅・薩摩 南端	96.6	168.0	大根占 山川 佐多岬 開聞岳
212	薩摩 甑島	101.6	80.4	里 手打 上甑島 下甑島
213	大隅 種子島	161.6	77.0	野間 馬毛島
214	大隅 屋久島	99.0	127.9	宮之浦

以上

スワヒリ語で紹介された忠敬さん

渡部 健三

話の発端はこうでした。

平成十五年十一月下旬のある日、NHK国際放送局に所属する女性から電話を受けたのです。

海外向け放送ラジオジャパン・フォーカスで

『江戸の知恵再発見』

と名づけたシリーズ番組を制作・放送しているが、その⑥として

『定年後を粹に楽しむ』

というテーマを取り上げることになった。ついては忠敬研究の面から、あれこれお聞きしたいので、盛岡まで出向きたい」とのこと。

それならば、遠い盛岡までわざわざ出向くに及ばない。東京には適した人が多いから、よければ紹介しよう、と答えたところ、「渡部と指定されているので、ぜひとも」と言います。

実は昨夏に入院手術して退院後、自宅で静養中の身でしたが、相手の熱心さにほだされて会うことにしました。

録音機を持参した彼女と一時間弱、現役当時の仕事内容をはじめ、

忠敬という人物に興味をもった動機、とくに彼のどんな点に惹かれたのかなど、一問一答のあと、これを編集して十一月二十七日(木)に、アフリカのスワヒリ語圏(文末【注】)向けに放送する予定と聞いて、意表をつかれた思いでした。

放送内容を一応録音はしたもの、心配したとおり、私にとつてスワヒリ語はまったくチンパンカンパンです。仕方なく、ケニアのナイトロビから岩手大学に留学中のA・グリフィス・グレゴリーさんに録音テープを渡して和訳をお願いしたのですが、日本語を書くのは苦手ですからということで英訳文をもらいました。けれども彼は農学部の学生ですから、この種の内容では、英訳に際してもいささか困惑されたらしく、その英文をさらに和訳する能力に乏しい私が、正しくお伝えする自信はありませんが、その辺をご寛容のうえ、大筋でとらえていただければ幸いです。

以下は放送内容のあらましです。

(男声)

江戸開府四〇〇年にちなんで、日本人の伝統文化の概略を話題にした番組を放送しています。

今回は、その⑥として、とくに江戸時代の人が隠居(家督を相続人に継がせること)してからの、いわゆる第二の人生を享受するために、趣味を身につけることを中心に考えていたということ。さらに、江戸時代の人と同じように、現代でも定年退職後の人生をどう生きるかということを考えている人が増えているので、そのことも話題にしたいと思います。

(女声)

太田空真氏(五十四歳)という人がいます。この人は会社を退職してからの生活についてカウンセリングをしているのですが、四年前に本を出版しました。その本には、江戸時代の庶民は、隠居してからのゆたかな生活を実現させるために、新しい仕事や趣味を身につけるこ

とを考えていたと書きました。本を出したあと、彼はいろいろな場で講演や会合をして活躍しています。

現代を生きる私たちにとつて参考にする点はなにか。どんなとらえ方をしなければならないのか。その辺について太田さんにお聞きしましょう。

(太田)

江戸時代を通じて、隠居後に芸能の道に入ったり、文芸の道に入ったりする人が多かったのですが、それに比べて現代の人の多くは、現役時代には一所懸命に仕事に励んでいます。けれども退職後にはどうしたらよいか、迷っている人が多いのも事実のようです。

(女声)

神奈川県の岩田芳晴氏（六十六歳）は太田さんの本の影響を受けた一人です。彼は六十歳で退職しました。現役時代、大型機械やスペア部品のセールスマンとして、ヨーロッパ、アメリカそしてアフリカなどに売り込んでいました。退職後の現在では過去の経験を活かし、ボランティアとして開発途上国で井戸を掘る仕事を援助しています。

(男声)

これらの生き方は、私たちにどのような意味をもたらしてくれるのでしょうか。

できるだけ無駄なお金を使わずに、よりよき社会人として好きなことをしながら、それぞれの生活の質を高めることが大事で、その点を私はちは学びたいと思います。

(女声)

そのためには、退職後の生活の仕方をどうすればいいのでしょうか。

昔は「人生五十年」などといわれていたように、現在とは比べものにならない低い平均年齢でした。だから、サムライの場合には三十代で隠

居する人が多かつたようで、父から息子に家督を譲り、そのあとは自分の好きな道、たとえば遊芸、文芸、畠仕事など、自分が選択することができたのです。

ここで、江戸時代の隠居について、江戸東京博物館の石山秀和氏に語ってもらいましょう。

(石山)

当時は農民であろうと商人であろうと、退職（隠居）することを楽しみにしていました。それは一般の人と比較して、質的に高い生活、とくに経済的に恵まれている人ほど顕著だったようです。

現代では、退職時期を自分で決めるのではなく、一定の年齢に達する

ことで自動的に決まることになりました（定年退職）。

江戸時代で、とりわけ高名な隠居といえば、日本地図を作製した伊能忠敬（一七四五—一八一八）をあげることができます。

彼はもともと、いまの千葉県で日本酒の醸造・販売その他いろいろな商いをしていて伊能家を繁栄に導いた人ですが、家業經營のかたわら、幼年時代から興味をもつていた数学や天文学の独習に励むのでした。

そのうちに、なんとかして本格的に天文暦学を身につけたいと念願した忠敬は家業を息子に譲り、五十歳のとき、当時は江戸と呼ばれていた東京に出たのです。

江戸で先生について正式に天文暦学を学んでいるうちに、暦学研究の面から日本各地の測量をする必要に迫られ、結局、全国をくまなく歩いて測量に専念し、日本全国の作製を成し遂げました。

測量は五十六歳のときから始めて十七年間かかっています。

この時代の測量手法や測定機器を現代と比較すると、あまり精度が

高くなかったといえますが、完成した地図はたいへん精密で、近代にいたるまで活用されていましたという事実があります。たぶん、人の目を意識することなく、実直に精密な測定を心がけたに違いありません。

このように、測量や地図を作製するなどの仕事に打ち込み、隠居後の生活もたいへん充実したものになりました。忠敬は、むしろ現代になつてから非常に有名になつたといつてよいでしょう。

(女声)

渡部健三氏（七十八歳）は岩手県盛岡市に住んでいます。盛岡は東北新幹線で東京から約二時間半のところにあります。六十八歳で退職したのを機に盛岡に転居しました。

渡部氏は理系の出身ですから、伊能忠敬の業績に興味をもつてはいたのですが、とくに岩手に移り住んでから七十歳のころに、忠敬が歩いた足跡をたどっているうち、彼の生き方に強く惹かれるようになり、伊能記念館や図書館に通つて学んだり、さらに伊能忠敬研究会に入り、この人物に深く傾倒するようになりました。

渡部氏は言います。

「学べば学ぶほど、忠敬という人物がますます大きくなつてくるのを感じます」

と。

さらに、「主治医の先生は、『渡部さんは今年、大きな手術をしたが忠敬さんから、励みをもらって、一日も早く元気になつてほしい』」と言つているそうです。

(男声)

最後に太田氏からコメントをいただきましょう。

(太田)

大切なことは、自分が楽しめる趣味をもつてそれを伸ばすことです。たんに、多くの人がやつてあるからという理由だけで、その趣味をそつくり真似るのは正しくありません。他人の模倣でなく、あくまでも自分に適した趣味を選ぶことが大切なんです。

(女声)

江戸時代は、隠居後に新しいライフ・スタイルを身につける人が多く、それが、ひいては、ひとつ的新しい文化につながつたといえるでしょう。いまの日本人も、退職を契機に、新しい文化を創造するくらいの気構えをもつてほしいと願っています。

(文責・筆者)

【注】スワヒリ語は、ケニア・ウガンダ・タンザニア・モザンビークなどの主要言語。アフリカ東部・中部で共通語として用いられている。



もし実現していたら

—忠敬と伊藤真一氏—

武田威

ある会合で偶然隣り合わせた老紳士が伊藤真一氏であつた。意外な
きさくさで問われるまゝ雑談を交わすうち、お宅が我家とバス三駅の
近くと知り二度程伺う機会を得た。三島自決事件（一九七〇年）など
も話題にした記憶があるから、三〇年以上も昔になろうか！。豊富な
想い出話は時の経つのも忘れる程であつたが、何とそれが伊能忠敬に
も及んだのである。忠敬に関して全く白紙であつた私は相槌も打てず、
今にして残念に思うのであるがその時の忘れ難い話を二つ御紹介しよ
う。

一、滿洲の天文台

大正も半ばすぎヨーロッパから帰国された氏は「満鉄」総裁の秘書に就任された。満鉄とは南満洲鉄道株式会社の略称で、日露戦争後のポーツマス条約で日本が獲得した満洲に於ける鉄道、鉱業等の権益を運営するために設立された半官半民の国策会社であった。

満洲は中国領土であつたが、辺境であること、中央政府の無力から日露の権益争いの舞台となつていていたのである。南北に走る鉄道沿線を離れると馬賊が跳梁し治安も定まらぬ状況にあつた。

「この事業は満洲に建設すべきである。日本人が大陸にかける世界的事業にすべきである」

とし、大石橋に近い迷鎮山頂に東洋一の天文台を造ることを提案した。松岡は一九一九年パリで開かれた第一次世界大戦講和会議・日本全権団事務所在勤の頃の上司であつた。

「日本の満鉄經營は何時迄続くか、何時中国に戻さなければならぬか、何時ソ連に占領されるか計り難い。この大地に東洋一の天文台を造つたら、たとえどの国が来ようと之を破壊することはないであろう。人類の文化に永遠に貢献することになるであろう」と説いたのである。

松岡は直ちに幹部を召集しこの案をはかつたが、労務部長一人を除き全員反対であった。

しかし松岡は予算の三割三〇〇万円を強引に通過させたのである。今
の価値に直すと三〇〇億円にもなるであろう。更に観測装置、設備の

大正天皇が崩御され昭和になり、喪が明けると昭和天皇即位の儀（御大典）の祝賀が国をあげて取り行われた。（一九一八・昭和三年）小学生活であつた私も旗行列に動員されたものである。「満鉄」に於いても記念事業の計画が練られ一、〇〇〇万円の予算で東京支社、大阪事務所の設立がきまつたが、たまたま政変で加藤高明内閣が総辞職し満鉄總裁に新たに三井の山本兼太郎、副總裁に松岡洋右が任命され、この計画も再検討ということになった。

の頃星を見上げながら何度もドズに落ちましたよ」と氏はジユネーブで見た星空の想出を語るのであつたが忠敬の簡易測量法に関心を持っていたようで、あるいは満人の測量隊を編成することを考えて居られたのかもしれない。

ため別に三〇〇万円追加したというからこの天文台が竣工していたら大変なものであった。

ところがである、間もなく来満した山本總裁がこの計画を聞いて一喝、しりぞけてしまった。かくして若し完成していたら日本が他国に留めた最も意義ある建設の一つは、うたかたの夢と消えてしまった。伊藤氏は、「私をして云わしむれば山本はエコノミック・アニマルの元祖である」と当時はやり始めたキー・ワードでしめくられたのであつた。

二、イスラエル鉄道の建設

一九四五年八月一五日、日本の降伏により第二次世界大戦は終つた。

満鉄傍系の日本製蠣株式会社の社長になっていた伊藤氏は、満鉄の引上社員と家族の受入に忙殺されていた。そのなかの一人A君が或日伊藤氏を訪ね

「私は今英國商社ジョン・マクフアレン社に勤めている。この会社はイスラエルからカリを輸入しているが、イスラエルとエジプトは仲が悪くスエズ運河を通れない。一度アメリカ国旗を揚げて通つたがもう通れそうもない。そこでカリの産地である死海からアカバ湾まで鉄道を敷いてもらえないだろうか。私はかつて山海閣から熱河（共に満洲の地名）まで鉄道布設前に車で踏破したことがある。またイスラエルからアカバ湾まで旅行したことがあるが、どちらも小石の原でよく似ている。この仕事を満鉄の鉄道部の人達でやつてもられないだろうか」

と云つて一枚の地図を出し、更につづけて

「私の主人は明治時代に日本に渡り大の日本臘員である。明治維新の人を崇拜し特に父上の伊藤博文公が好きである。戦後日本人との

共同事業でだまされて大損をしたが、あれは本当の日本人ではない。日本人は約束を守り信義を重んずる。伊藤公のお子さんが満鉄におられるなら是非その方に頼みたいと云つておる。」

伊藤氏は早速熱河線の建設責任者を招きこの計画書をはかつたが、何せ南北三〇〇キロの地を新聞紙大の地図一枚である。頭を抱える担当者を説得し、数日後に計画書をまとめ上げた。途中切換一ヶ所ディーゼル機関車を使用する。A君はこの計画書を受取り一週間後礼金をとどけにきて

「伊藤さん、この話はきっと日本に来ますよ。主人はドイツは嫌いだし、アメリカ案は切換が二ヶ所で断然こちらの案がすぐれている。

一〇月には注文がくるから用意していく下さい」

と云つて帰つた。

ところが一〇月を待たずにスエズ運河をはさみエジプトとイスラエルは砲火を交えることになってしまった。伊藤氏が引揚者の活動の場にと願つた中東を舞台としたこの雄大な計画は、遂に日の目をみることなく消えてしまった。

伊藤氏は遠い想出を呼び起しながら

「第一次世界大戦中『アラビアのロレンス』や『イランのワスマス』という風雲児が現われたが、地図の先駆者として『シナイ（アカバ湾をはさむ西側の半島）の忠敬』が活躍していたら日本の世界政策も変わっていたかもしれないね」と、今は笑話のうちに終えられたのであつた。

（文中にある通り伊藤氏は博文公の令息）

（たけだ たけし・東芝OB）

『旌門金鏡類録』(三)

小島一仁

丙午・丁未の大凶年

天明の飢饉は、天明六丙午・七丁未年(一七八六、七)にピークに達した。このときの記憶は、後々まで忠敬の脳裡に深く刻みこまれていたらしく、その二五年後、文化九年(一八一二)、六七歳になつた忠敬は、測量出張先の九州柳川から、佐原の妙薰尼に宛てて、次のように書き送つている。

丙午・丁未の大凶年米価高直之節ハ、公儀ニ一切御救の御手当無ニ付、國々も餓死に及候『伊能忠敬書状・千葉県史料』

幕府も地頭所も、何等救助の手だてを行うこともなく放置した農村で、忠敬は、いつたい何をしたのであろうか。そのことも『金鏡類録』の第二冊に出てくる。

飢饉がおさまつて間もなく、寛政元年(一七八九)一二月、地頭所は幕府の通達にもとづいて、「孝行又は奇特成儀有之」者についての調査を行つた。その調査に応じて、盛右衛門が養父忠敬の「奇特」な行為を書き記して提出した文書の下書きが第二冊にのつてゐる。前回に記

したのと重複するところもあるが、その内容を整理し、少し説明を加えながら紹介してみよう。

①下総国佐原村三郎右衛門は由緒ある家柄で代々村役につき、村益につくしてきたが、ことに当三郎右衛門(忠敬)は村方の為に深切な取りはからいをし、利根川洪水の節は水防に心掛け度々御普請を仰せつけられ、格別出精したので、地頭所から御褒美をいただいた。

②天明三年(一七八九)、「砂降並大風雨凶作之節」は、地頭所からも「御年貢皆無」のはからいとされ、その上、「御救扶食金」を下された。

③出水後「国役御普請」(破壊された堤防の修理など。費用は幕府や地頭から出る)が行われ、出精したので普請も丈夫にでき、また、百姓水呑にまで過分の賃錢が渡つたので、村方一同凶作の難渋をしのぐことができた。

④国役普請で下された金の内で、杭木や竹などを「御定値段」で村請にしてそれより安く買い調べ、その差額の金をもとにして、地頭所へ連絡の上「永久相続金」をつくり、今後の村普請や凶作のそなえとした。

⑤このとき、三郎右衛門は名主として右のことを取りはからい、そのつとめを果して名主役御免となり、村方後見を仰せつけられ、苗字も許された。

⑥近年不作続きの上、天明六年午七月には、大洪水のため「村内田畠米穀一切これ無き」状態となり、百姓は種糲はもちろんその日の食物にもさしつかえる有様で、さきの「永久金」などでは、大勢の困窮人にはとても行きとどかなかつた。

⑦そのため、このとき三郎右衛門は、百姓たちに種糲・扶食の貸付・

合力を行つた。水呑百姓で特に困窮の者に対しては、天明六年の暮から翌年の七月まで、町内毎に世話を立てて、数度にわたつて穀物や金錢を施した。それで、一三〇〇軒余の村方で餓死人を出すこともなく安穩に凌がせた。

⑧村内で質屋を営む者は、質入物が殺到したために、質物を取っための金錢の手当ができず商売を休むようになつた。それでは困窮の者が甚だ難渋するので、利子の安い金を質屋に融通してやり、鍋釜や古膳椀まで質にとらせ、新穀ができるまで続けさせた。

⑨天明六年の暮から、他国他村より大勢の浮浪者が入りこんできたので、村内有力者に相談して、毎日、一人一錢づつ合力させるようにした。

⑩飢饉の後の疫病流行にそなえて、村中に施薬した。

⑪天明七年四月はじめ、困窮の百姓の中には青麦茹をするような様子が見えるので、その町内に相談して、麦の実入りまで金穀を合力し、鎌留めをさせた。

⑫天明七年五月中、米穀払底、米価高騰のため、江戸で打ちこわしがおこつたことが伝わつてくると、村内の商人たちがひそかに相談してくれるよう願つてもらいたいと内々申し入れてきた。役人の賄い費などは、商人たちが割前で出すようにするという。そこで、地頭所の役人にさわぎを防いでもらうよりも、その賄い費を小前たちに合力し、もし他所から悪者たちが入りこんできても、合力をうけた小前たちが防ぐようにしたほうがよいと、よく云い聞かせたところ、承知したので、小前たちに合力させ、数日間凌がせた。

この件については、次に原文と解説文を掲げておく。

未ノ五月才在設拂屋甚も由と付シ府内着邊し安ヒ也
於又上吉山が敷多場所ちゆきとも邊もあらすれ村内高
海世はりみ不内様と村内諸ご物の如シ數甚傍之増給
あれ役市中半ト一わが是れ門と寺宇を右以令被用
直多才經へ等もあく事別令は監司より各地区役市
役役おれ不右役料甚と多河内を第化請ひ落とめ
入出立と申候がれ少くもあら活けねばりと申候
利絆甚の不役物はと有少くとあた今方と申候

未ノ五月中米穀払底甚高直^ニ付、御府内も騒々敷候趣相聞、
猶又在辺^ニも家数多場所は何れも騒々敷御座候^ニ付村内商内
渡世仕候もの共内談之上、村内騒々敷相成も難計、依之地頭所江
相願役人中御差下し相願吳候様内々申聞候^ニ、右役人中雜用
逗留申賄之儀は商人中割合仕差出し候様申候間、地頭役人中
御防相願候より右賄料小前^江合力致し候^ハ若他所より不埒之もの
入込候とも合力^ニ預り候小前之ものより防候様^ニ致し候方可然趣篤と
利解申聞候所致承知候^ニ付、小前之もの右合力を以數日相凌かせ申
候事

(13) 天明七年の正月二日になると、村内で米穀売買をしていたものも売り仕舞で商売ができなくなってしまった。三郎右衛門は、前々から考えて、上方筋や近国の作柄よいところから穀物を買いこんでおいて佐原に運び、近国近郷へ売り続けた。また、村内については、春米商売をしている者に安値で売渡し、小前の生活困窮者たちには金錢を合力し、春米商売のものから安値で売渡すように取計らつて、互に凌がせた。

(14) こうしているうちに新穀も出来、村方一同が何とかやつていけるようになつたので、残米を江戸へ運んで売つたところ、江戸はまだ穀物払底であつたので大へんな利徳となつた。

右の(13)(14)に関する部分についても、次に原文と解説文を掲げる。

年々兵火と月報せ一切をくふは月例より新穀を賣ふをあ
高さづき終り穀物正月貰はるはかまひかみは今
と方筋を小國の方面に運ぶら船を買積むる事あらむ
そぞれの事は清と稱れ月橋下へ近國をなよ候候事
村内にゆゑて春米渡せしめし穀物ト並び度へ出づ國窮し
あらじ今度と多く春米高きうのを以て度り金を寄附
お外へ貢奉を難候事と申す新穀が年をと換ひ先候は
穀物をこゝへ送りて新穀而て春米村方一同を候候事と申す
が事にあらむ種也あらまし方内穀を拂候へあらむ
却て春米渡せしめし穀物を拂候へあらむ

午年不作付穀物一切無之候付、例年米穀売買仕候もの共商人は少々時候穀物正月一月充仕候處、兼而勘弁仕候間上方筋井近国作方宜場所ニ穀物買積仕、御当地着船之節は其掛問屋江口錢を拂村方江積下し候近国近郷迄始終売続村内之儀は春米渡世のもの江穀物下直売渡し、小前困窮之もの共江錢を合力仕、春米商売のもの共より直段下直、売渡し候様ニ取計相互難渋相凌かせ、尚又新穀出来候迄と損毛覺悟仕穀物用意仕候處、追々新穀も出来村方一同取続候様罷成候間残米御当地正為積登申候所未タ御府内穀物拂底之節着船仕却而格外之利徳相成誠隠徳帰報之儀と難有奉存候事

盛右衛門が記したという文書の内容は、大体、右のようなものであつて、天明の飢饉に際しての忠敬のはたらきをまとめて記している。同様の文書に、これより一〇年以上もあとになつて、佐原村の百姓たちが幕府の評定所に提出した箱訴訴状の控えと下書、及び勘定奉行所での箱訴の審理経過の記述があり、いずれも、『金鏡類録』第二冊に記されている。しかし、訴状は、忠敬に苗字・帶刀を許してもらいたいという目的で書かれたものであるから、幕府に聞えては都合の悪いことはぬかしたりばかしたりしているので具体性に乏しく、審理経過の方は具体的なところもあるが、部分的断片的である。それらにくらべると、盛右衛門の記したものの方が、年代的に古く、やゝ具体性もあって、史料としての価値が高いようと思われる。ただし、聟養子が書いたものがあるので、その点を頭において読まねばならぬことは勿論である。

さて、盛右衛門は、養父忠敬の「奇特」な行いを地頭所に報告したのであるが、この文書を通読すると、「奇特」よりも、忠敬の佐原商人としての姿の方が大きく浮び上ってくる。

④の国役普請の交付金をやりくりして「永久相続金」をつくったことをはじめとして、⑦の町内毎に世話をたてて施与を行つたことなど、いかにも行きとどいたやり方で商人らしい。当時、佐原村には、すでに現在の佐原市の中心部をなす町々の原型が形成されていた。上仲町・下仲町・本橋元・新橋元などの町々がそれぞれ町のきまりをつくり、今の町内会長や会計にあたる役員をおいて、ある程度、自治的な運営を行っていた。穀物や金銭の施与にあたつて、忠敬が村役人たちにたよらず、直接、町々にはたらきかけたのは、商人らしい、実質的なやり方であったと考えられる。また、⑫の米価高騰にあたつて、打ちこわしを防ぐことは、金持ちの商人たちにとつて死活の問題であつたがこのとき、役人におさえてもらうのではなく、困窮者に金銭を合力することによって防いだというのは、商人的な合理主義のあらわれと見てよいであろう。そして最後の⑯を見ると、忠敬は、前々から上方やその他作柄のよいところから米穀を大量に買い入れておき、飢餓にあたつてそれを近国近郷及び村内に安値でうりつけたが、新穀が出来てもう大丈夫となつたときに、残米を江戸へ運んで売つたところ、「格別の利徳」を得たというのである。忠敬が後年記した手紙によると、このときは、大損になりはしないかと、ずいぶん心配したようだが、結果としては、大もうけになつたのである。このようなやり方で忠敬は、他の機会にももうけたことがあつたのではなかろうか。

盛右衛門が書いたことには、多少の誇張があるかも知れぬが、大体事実としてよいと思う。しかし、十分に注意して読まねばならぬ点も



ある。この文書を読んでいると、天明の飢饉のときに、忠敬一人が大活躍をしたように思つてしまいそうである。だが、佐原村で窮民救助のためにつくしたのは、忠敬だけではあるまい。伊能家と並んで「両家」といわれた永沢家、永沢治郎右衛門も忠敬と同様のはたらきをしたのである。もしも、永沢治郎右衛門が反対したり、知らん顔であつたなら、忠敬のした事は、ほとんど効果をあげることができなかつたであろう。今は、永沢家に関する記録はほとんど失われてしまつているので、具体的なことを明らかにすることはできないが、『金鏡類録』に散見する記事からしても、永沢治郎右衛門が、少なくとも忠敬と同等のはたらきをした事は、容易に推察できるのである。

天明の飢饉に際して、幕府も地頭所も、農村に対しても、ほとんど何の手当もできなかつた。そういう中で、佐原村では、永沢・伊能の「両家」が中心となり、他の「貯徳のもの」にもはたらきかけて、一人の餓死者も出さずに、飢饉をのりこえたのである。

和算の番付け表から

伊藤栄子

甲州和算を研究している友人から、一冊の本が届いた。「郷土の和算の發展につくした井上昌倫」と題した本で、山梨県郷土数学研究会編で出版された。これは、甲州和算の本「峠算須知」の著者の井上昌倫について、この和算家の業績を顕彰し、現代でも和算の履修を進めている。内容は、塵劫記や算学啓蒙を主に、参考にしたらしいと説明がある。両書とも江戸時代に和算の基礎として、多くの人々が学んできた本であった。塵劫記については、研究会誌一九九九年夏季二十号の中、「小野栄重と和算について」に記載した。「算学啓蒙」は中国の数学書で、これにより代数計算がわが国に導入された。ここでは、この本の末尾の方に、添付されていた和算の番付け表が、目にとまつたので紹介したい。

「番付け表」は、今でも相撲の興行で親しまれているので、目にされた方も多いと思う。力士の順位がひと目でわかり、長い間、庶民に親しまれてきた摺り物であった。相撲番付けには、上方相撲と江戸相撲の表とがあり、上方の相撲番付けは、横長で東西を二枚で一組にしたが、江戸相撲は東西を一枚にして、縦長にしたといわれる。その後、江戸相撲番付けのパターンが定着して広まつた。この初出は宝暦三年（一七五三）深川八幡での勧進相撲の番付けであった。深川八幡宮は伊能忠敬が測量の旅に先立ち祈願をして、ここから量地へ向つた神社で、創立も古く境内には、今でも古い相撲の碑が残つてゐる。

番付け表は相撲よりも、芝居番付けの方が古いといわれるが、この両番付けを利用し、その頃、これに倣つた見立表（なぞらえた表）を作ることが大流行した。上方では化政期頃から、江戸では天保ころからの物が、多く残つてゐるという。面白いことに当時の人々は、世間一般のありとあらゆる物を、見立番付け表にしてしまつた。

私の手とともに、幕末の香合番付け表や、商人の見立（嘉永五年）長者番付け、古今南画要覽（文人墨客の大番付け）嘉永六年、忠臣蔵の義士の番付けから、下戸上戸左右競（名物名店番付け）など今でも当時の見立番付けは、庶民に関係した史料から散見できる。

この和算の番付け表は、群馬県群馬郡榛名町の中曾根家の所蔵である。上毛は江戸時代、和算の大変盛んな土地であつたから、今ではめずらしい番付け表も、残されていいたのである。しかも榛名町は、小野良助栄重の故郷の板鼻から、非常に近い場所にある。

和算の表は、私も初めて見るものであり、ここに記載された名を見ると、伊能忠敬と直接、または間接に関係のあつた人々を、幾人か拾うことができる。

「古今名人算者鑑」（ここんめいじん、さんじやかがみ）とあり、文政九年丙戌仲春（陰曆二月、一八二六年）発兌（^{ハッダ}発行）である。真中の欄の頭には相撲番付けなら、蒙御免（ごめんこうむる）と書かれれる所であるが、この場合は、翻刻を不免（ゆるさず）となつてゐる。勝手に摺られては困ると、目立つ場所に入れてあり、相撲番付けになぞらえて作られた。

表の向つて右は閔孝和の広めた関流、左が会田算左衛門の興した最上流（さいじょう流、又はもがみ流ともいう）の算者の欄である。和算の流派は凡そ二十流派あるといわれるが、何といつても二大流派と

和算番付け表

表となつたのであろう。

まず、関流の大関は藤田貞資^{サダスケ}、嘉言父子^{ヨシトキ}、並ぶ神谷定令、小野栄重^{ヨシタカ}らは藤田父子の高弟であり、栄重は、第四次伊能測量に参加した和算家で、故郷の板鼻に隠退した後も、度々江戸の忠敬宅を訪れていて、最も養蚕の盛んな上毛の栄重に、真綿を注文して送らせた記録もある。また上から三段めの、左から五人め、上毛、劍持要七郎（章行）とあるのは、小野栄重の一番弟子である。

同じ段の中程に最上徳内の名が見える。徳内は間宮林蔵より以前に、幕府の蝦夷地方、樺太までの測量、探検に加わり、ロシア語に精通していた。然し当時は、樺太が島であることは分らなかつた。徳内と忠敬との接点はないが、測量探検のさきがけとして入れた。

関流の項六段めに、大坂、間清一郎という名がある。大坂の間（はさま）といえば、重富を思ひうかべるが、重富の長男、重新がこの清一郎であり、後継者として、麻田流の天文学も研究し、和算の免許を得るほどの実力者であつた。

左側の最上流の大関は、会田算左衛門安明で、忠敬とは非常に親交があつた。忠敬の江戸日記にも、しばしば登場する。名は安明（やすあきら）とも読む。羽州山形の人で、藤田貞資の高弟の神谷定令と親しく、はじめ安明は、定令を通して貞資に師事しようとしたが、失敗し「改精算法」を出版して藤田を攻撃した。のち藤田の関流と会田の最上流との論争は、二十年余も続いたといふ。しかし会田の図形研究は隆盛を極め、以後は和算の主流となつた。図形研究はより具体的であり広まつていった。最上流という名にしても、これこそ最上であるという意を込めたといわれる。もがみと読むのは、出身地にちなんでの呼称。著書は二千冊余ある。

忠敬は、伊能家に入夫してから、数学について広く諸書を読み、當時最も進んでいた関流和算に通じていた。時に算学について、会田安明と意見を交わしたというから、可成の力はあつたであろう。世田谷伊能家文書の中にも、忠敬の書いた和算の問題が二題残つてゐる。多分、孫の忠誨に与えた下書きかも知れない。将来、名主役を継ぐ者は、年貢や石盛、田地、田畠に関する計算位は必須である。これより古い時代には年貢計算のために、廻り歩く商売もあつたというが、江戸後期になると、世襲名主から、時には合議制で名主を選ぶ所もあり、能力を問われる時代になつてゐた。

同じく上段に市野金助茂喬の名が見える。金助は天文方下役で、第五次伊能測量に参加したが途中大坂から帰府してしまつた。私が読んだ文書の上での印象はあまり良くなかった。病氣という理由であったが、仲間との折合いがわるかつたらしい。しかし今、会田安明一門を語るとき、必ずその中には市野茂喬の名があり、門弟四天王の一人として、彼の名を外すことはできない。以前に解説した徳山毛利家文書の中の老中触にも、天文方下役として名を連ねてゐた。金助は自分の学んできた算法に、確かな自信があつたのではないか。帰府の後また暦局に戻つてゐる。忠敬は晩年になつて、金助を呼び出して役所廻りの使い等を頼んでいいから、気安い間がらでもあつたと思われる、樺円通術を著し、円中逐円を編し、鏡影互移之題解を撰述した。

市野金助の左に、古川某（なにがし）氏清の名がある。氏清の子は古川新之丞で、三段の左から四人めに出ている。父子ともに和算家として秀で、新之丞は古川謙ともいう。下河辺政五郎の数学の師であり、測量先で客死した坂部貞兵衛も古川謙に師事していた。暦局に出仕していた政五郎は、高橋景保の手附下役として、暦算に関する仕事に携つていたが、前記の市野金助が帰府した後の補欠として、以後、測量

隊に加わったのである。

二段の右から一人めに、京、小嶋典膳の名がある。号は壽山、九右衛門ともいう。忠敬とは数学上の交友といわれ、忠敬所持の十桁の対数表は、九右衛門から送られたもので、彼は京都で土御門家の都講（塾頭）をつとめていた。

その下三段めの中程に、足立左内の名が見える。左内は信頭ともいいう。れっきとした天文方。伊能忠敬とも親しい関係にあった。大坂時代、麻田剛立に入門する以前から、算学に長じていたといわれ、幕命により松前で馬場佐十郎と共に、ロシア船の船長だった捕虜のゴロウニンから、本場のロシア語を学んだが、彼らの学識にはゴロウニンも感嘆したという。鎖国時代の日本にも、こうした知識人のいたことを、改めて外国人に知らしめた。主なものに、ロシア語辞書の編集がある。また左内は、浦賀、常陸大津ではロシア人と接衝して、通詞として活躍し、天保改曆にも参与し、多才な人として知られている。

同じく天文暦学にも通じていた子の重太郎（信順）は、父より早く他界したため、天文方は繼がなかつたが、忠敬の孫の三次郎（忠謙）に暦学を教え、その子の足立信行は、祖父の名を継ぎ左内と改め、幕府最後の天文方となつた。

暦局では市野金助の上司であつた左内が、番付け表では三段めに位置している。和算の流派には免許の内容による順位があり、当然のことながら、実力のはつきりした厳しい世界ではある。

更に四段めの右から十一人めに、エト（江戸）同、渡辺賢二郎といふ名が見える。実は辺と賢の字にかけて、紙面に虫くいがあり読みにくい。伊能測量に参加した頃は、尾形慶助といった。会田安明の実子といわれ、後に香取神宮の神官尾形氏の次男として育つ。文化十二年の頃、渡辺氏を嗣ぎ、渡辺慎という。また賢次郎、啓次郎等とも書く

というから、幾つもの名を使つてていたらしい。当て字として、次を二と書くことは、当時よくある事であつた。父の会田安明から数学を修め、伊能測量には、十六才の時から参加し、第二次から第十次まで、五回にわたつて、忠敬にはよく協力した。

このように、測量や天文暦学に關係した人々は基本的に和算を学んでいて、免許を取らないまでも、算法の基礎を身につけていたのである。平山郡藏、伊能秀藏らも、俗に読み書き算盤を教える手習いの師匠をして、生活をしていたこともあつた。

最上流の六段めには、冒頭の甲州和算の本の著者、カヒ（甲斐）井上昌倫の名がある。（○印は、後でつけられたもの）数学史には、井上昌倫、号は青柳、「峠算數知」は郷里で日用近易の算術書となつた。と書かれている。

最下段は頭取となつてゐるが、真中の項に次いで、和算に貢献した人々の名が並んでいる。

和算の研究は初め武士階級であつた。関孝和も幕府の勘定方である。しかし江戸中期頃から、和算を学ぶ人は次第に一般庶民に移つていつた。和算に限らず他の学問、文芸、遊芸などの活動に富裕な町民が加わり、やがて主流をなすのである。和算もこうした風潮の中で広まつていつた。

前出の小野栄重は中農の主人であり、同じく上段の日下誠クスサカは、関流第五伝の免許を持ち、女郎屋の且那であつた。大坂の間氏は、豪商として知られる。また最上流の二段めには、縫箔屋乙五郎という名、他にある大黒屋などの屋号は、町の職人か商人であろう。これらの武士ではない人々が趣味として学んだことが、且那芸を越えて高度なものに成長していった。しかし和算家として名の有る人がこの表にすべて出ているわけではない。昔の数学史を見ると、数理の研究で自分の理

論を立て、著書を出版して、数学史に名を留めた人は、この表以外にも多数いる。ただ門人として、夫々の流派の免許を得た者がここに並んだと見るべきであろう。免許を取得するには、本人の実力は当然のことながら、それなりのお金もかかり、财力に余裕の無い者、または諸般の事情で、取得しない者もいたと思われる。

元来、和算が高度になればなるほど、生活には結びつかず、道楽の類と見なされていた面もあった。しかし数学はそれに打ち込んでいる者にとって、不思議な魅力を持つ学問らしい。彼らは算額を神社、仏閣等に掲げ、出題したり、回答を待つだけでなく、近辺諸国を遊歴して歩いた。算法を教授して報酬を得ることもあり、或は問題を出し、答について考えを討議しながら、あちこちを渡り歩いたという。こうして、今まで閉鎖的であった和算界も、秘伝は徐々に公開されるようになっていった。

和算の広がりは主に関西より東国、東北にかけての地域に多く見られるといわれるが、この表でも、名前の上の出身地がそれを示している。コピーの又縮小なので、細かい字は、どうにか判読できる程度であつた。

江戸（エト）・大坂・ナコヤ・熊本・仙タイ・美ノ・北エツ・足利・八王子・アイツ（会津）・山形・京・三河・テフシ（銚子）・上毛・下毛・松山・アカシ・ミト・弘サキ・ビンゴ・沼田・サ・山・イツ（伊豆）・アハ（阿波、安房ではない）・トハ（鳥羽）・二本松・ムツ・シナノ・ムサシ・新庄・カヒ・桑名・延岡・久留米など。
久留米は藤田貞資、嘉言父子が久留米藩主有馬頼箇に招かれて、二十人扶持を給せられ、久留米や江戸で勘定方をつとめた。藩主自身も和算家で著書もある。貞資の孫の代まで藩主に仕えたが、出身地ではない。

たしかに、これらの地名を見ると、西国地方の人でここへ名を記されている人は少ない。しかし、これとは別に、吉田光由により出版された塵劫記は初版（寛永四年・一六二七）以来、すでに全国的に広まつていて、塵劫記の内容による算法は、社会が必要とするものになつていて、この本は度々版を重ね、寺子屋の教科書として使われた。ただ、免許を得るような、高度な数学は庶民の生活とは余り関係ないが、彼らの力が、和算の普及の一助となつたことは確かである。

江戸の後期は比較的の自由に、庶民が旅に出られる様になつていて、また参勤交代に伴う人々、各地の物産を運ぶ北前船や大形船によつて、夥しい交易品とともに、文化やその土地の物産が都市に伝えられ、また都市の文化も地方へ伝わつた。飛脚便も発達し、出版物などは注文で取り寄せるもので、和算の急速な広がりも、こうした運輸の便や人の交流によつて、次第に発展していくとも考えられる。この商業資本の進出、これを動かしていたのは商人の力であり、この表からも、武士階級に代わる新しい層の抬頭が見えてくる。

参考文献

- * 天文方代々記 大崎正次編 国立国会図書館蔵
- * 岩波日本史辞典 岩波書店
- * 大日本数学史 下巻 大阪府立図書館蔵
- * 日本人名大事典 平凡社
- * 伊能忠敬 大谷亮吉 岩波書店
- * 歴史読本 78-13 番付に江戸を読む 新人物往来社
- * 数学の天才列伝 中山栄之輔 竹内均 ニュートンプレス

「忠敬を詠む」（一）

伊能 洋

平成一〇年の俳句年鑑所載。山曆同人の野島牽牛さんが見つけて教えて下さった。
糸遊は陽炎かげろうである。

伊能忠敬の歩みで初渚 小川恭生
(賜主宰)

俳句誌やカレンダーなどで、たまたま忠敬をテーマにした作品に目が止まつた。そのいくつかをご紹介したい。そして他にも知らない作品が多く有るのではないかと思うので、ぜひ皆さまのご教示をお願いしたい。

母、多嘉子(俳号三木つゆ子)の句集にも十句余りの関聯句があり、拙句もいつの間にか二十に及ぶ数になつた。佳句とは言い難いが記録の一つとしてお目に掛ける。忠敬は狂歌をたしなみ、その何首かが残されているが決して上手な歌詠みではなかつたようだ。

東京国立博物館

伊能図に海の韻ひびきや冬に入る 平井伊都子

(山曆同人)

平成一六年二月号の俳誌山曆所載、青柳志解樹
主宰の特選句の一つである。

糸遊や忠敬翁の歩巾大

小川恭生
(賜主宰)

江戸地図に吾が町重ね秋燈ともし

萩庭一幹
(山曆同人)

平成一五年九月山曆中央句会出句

忠敬記念館三句

曆学の初志貫けり秋座敷

吉田テル
(山曆会員)

家訓の碑読みをる面に秋日射す

秋の雲御用旗立て測量す

山曆俳句会須賀川支部合同句集所載。頂いたお手紙に「天と地を測つた男」伊能忠敬の単行本を孫と一緒に読みました。小学生の孫は記念館をよく見てきたので親しみを持って音読しています。とあつた。

大川治兵衛宛

文化四年六月十一日付け書簡「X 5」

安藤由紀子

この文書の原本は早稲田大学の所蔵で、影印本として同大学より出版されたものから抜き出して、紹介する。

一、仲間奉公人御心当之儀、先達て被仰遣候間

去丑年相極候南中村仲間三人

給金之儀、早速御返事ニ申進候 当時蝦夷

表へ堀田攝津守殿、大目付中川

飛驒守殿、其外御目付遠山金十郎、御使番衆

御出立ニテ、仙台、出羽、秋田等へ蝦夷

詰人歩(仙台へ五百人、秋田へ三百人) 被仰付候て

上ニも御用多ニ御座候得ハ、当秋

出立之義如何ニ可有之候哉 殊ニ

地図も大二手間取候間、出立之事

何共申兼候 依之奉公人内借等

一件の事に當て先輩を差し
去丑年吉原に南中村仲間三人
被金一袋(五斗)と南野(五升)を
奉上 承西張拂守殿、大目付中川
相極守殿(山室守)に以従者此
四人とも仙毫(山室守)が相手にせらる
て送り奉(山室守)と云ふと云ふ
上手も寄り奉る事無く南秋
かうすの風(山室守)と云ふと云ふ
此圖をもと多分りかず半手
の手(山室守)と云ふと云ふと云ふ
被金一袋(五斗)と南野(五升)を
奉上 承西張拂守殿、大目付中川
被金一袋(五斗)と南野(五升)を

之儀ハ御見合可被成候 去丑年ノ
支度金壹両式分 ハらんじ（わらじ） 烟草（たばこ） 共
合、金四両式歩ニ御座候 此度ハ右給金
之外ニ日々御用勤 出情候得ハ月々ニ
少々宛も褒美遣候所存ニ御座候
尤、人ニ寄候てハ、海岸難所も候得ハ
相勤り不申候 御心当御座候ハ
急度御極メ不被成、国所、人頃、
被仰遣可給候 此方ニても坂部等へも
相頼置申候 尤、給金前かし少、
江戸風ニ致度候 余分かし候てハ
病氣等ニて暇遣候得ハ、返金六ヶ敷
御座候 必、御急キ不被成、実性ナル
年若、髪月代等相成候もの
宜御座候 御見当候ハ、御極メ不被成
前々被仰越可給候

（以下次号）

文化四年、忠敬は珍しく一年間江戸にいて、六月頃は文化二年から三年にかけての第五次測量の結果を、地図にまとめるのに忙しかった。この書簡によれば、年内に、第六次測量（四国）に出掛ける積りだったことが分る。実際は実行できなかつたが。

宛名人の大川治兵衛は友人でもあり、米・酒の商いの共同經營者で、長女妙薰の勘当が解ける文化七年までの間ずっと、測量のマネージャーとして忠敬を助けた人である。同行させる下働きの奉公人を手配するのも、彼の仕事であつた。

地図作成が難航していること以上に、年内の出発を危うくしている原因に蝦夷地の外交問題があつた。このことに触れた忠敬の書簡は、非常にめずらしい。

ロシア人の南下はしきりであつた。幕府も数回にわたる調査隊を蝦夷地に送つてこれに対処し、この文化四年に蝦夷地を幕府直轄地にした。

これまで通商を求める国の正使二回（レザノフとラクスマン）を幕府によつて追い払われていたロシアは、武力で威嚇するしかないと考えるようになつてゐた。貿易を業務とする露米会社に属するフヴォストフ大尉とダヴィドフ少尉は、本国の許可を得ず蝦夷地の日本人植民地の攻撃を敢行した。この文化四年四月二九日エトロフ島シャナに、軍艦二隻で現れた彼らは、軍事力をもつて無力な幕府軍を撃退した。間宮林蔵の武勇伝が伝えられたのもこの合戦だった。

幕府は六月、天文方も支配下におく閑僚、若年寄・堀田摶津守正教をはじめ幕府上席の官僚を蝦夷地に派遣した。前代未聞の反応である。このように、文化四年は、蝦夷地を巡る緊張が一挙に高まつた年であつた。

忠敬は書いている。「現在、蝦夷表へ堀田摶津守殿、大目付中川飛騨守、そのほかお目付遠山金十郎、御使番の方々ご出立で、仙台、出羽、秋田などへ蝦夷詰めの兵隊を出すよう御命令ありとのことです。仙台には五百人、秋田へは三百人の由。お上にもご多用中なので、この秋出立できるかどうか不明です。殊に地図のほうも大変手間取つておりますので、出立の事なんとも申上げかねます。」

次いで、下働きの奉公人の手当について詳しい言及があり、その実態がわかつて、大変貴重な手紙であることが分る。

「したがつて、奉公人を決め前貸しをさせることなどは、見合わせてください。この前の測量の給金は、一年に付き三両でした。支度金は一両二分、わらじ代タバコ代共で合わせて四両二分でした。

こんどは右給金のほかに日々御用に精を出した場合には、日々少し宛、褒美を出す積りです。

もつとも人によつては、海岸の難所もあつて、勤めがたい場合もあるでしよう。

お心当たりの者がおりましても急いでお決めなさらず、生まれ在所、年頃などお知らせください。当方でも坂部などへも頼んでおく積りです。もつとも給金の前貸しは少なくして、江戸風にしたいと思います。余分に貸すと、病気などで同行できなくなつたとき、返金が難しくなります。

必ずお急ぎなされず、誠実な人柄で年の若いもの、しかも前髪の者でなく、月代（さかやき）を剃つてある者が宜しいと思ひます。よい者がおりましたら、すぐお決めなさらず、前もつてこちらへお知らせください。」

良い働き手を得るのが大変だったこと、能力次第で褒美を与える積りだったこと、支度金、わらじ代、タバコ代を別に払っていたことなどが分る。

次の第六次（四国）出発は、翌文化五年一月二十五日で、帰着は六年一月一八日だったから、丁度一年であった。日銀の貨幣博物館のホームページでは、一両＝三〇万円、四〇万と試算しているから、年給三両は、一両、三〇万円として年収九十万円程度になる。宿泊費と食事代はべつだから、四国一周の重労働で、一年間九十万の給金は、高いだろうか、安いだろうか。山坂あり海岸の難所ありで、雨以外の日は歩き通しの命がけの一年間、今の感覚でいうと安いと思う。もっとも食べるだけの生活の人も多かつただろうから、充分に支払われたというべきかもしない。

手紙はこれで約三分の一である。



伊能忠敬の持病薬
佐久間 達夫
「伊能忠敬研究会誌」第三五号で、杉浦守邦氏が、伊能忠敬の持病について詳述してくださったので、忠敬が服用されたとおもわれる持病薬を記してみたい。

「忠敬先生日記二十」（第六次四国・大和路測量日記）の巻末に、
天瓜粉 三両、桔梗 一二両、薄荷 一両、貝母 一両、
陳皮 二両、広東人参 一匁、右六味細末。

右六味、目方に砂糖を入れる。
と、記述してある。

注釈 薬種の量目の単位 〔『広辞苑』 岩波書店発行参考〕
一両は四匁。四匁四分や五匁のものもある。

○薬効 〔『薬草カラーアイコン』 主婦の友社発行参照〕

天瓜粉	キカラスウリの異称。解熱、せき止め。
桔梗	痰をともなうせき薬。
薄荷	アミガサユリの異称。痰切り、せき止め。
貝母	ミカンの皮をほしたもの。せき止め。
陳皮	強壯、健胃。
広東人参	

前記六種は、薬効から推測すると、忠敬の持病であつた「痰咳」の病（杉浦氏は、慢性気管支炎と記述）の薬であろう。

また、忠敬は、「瘧」を文化三年四月の下旬、長門国秋穂浦（現山口県秋穂町）で発病し、同年七月末日迄、隊員と行動を共にすることができなかつた。前記持病薬の次に、「瘧疾」（マラリア）、行氣香薷、加蒼葛」とも記してある。

昭和十六年九月廿日

工監博士 石井九介
全 牧田援

君の代へ手本も

故尾星 ねじゆ

六六茶子む連者之

おお年育十日
伊能翁正合

偉業

享作生 中原岩之助

全

小出甚太郎

録翁狂歌

李哲名井極

昭和十六年十月六日

東京控訴院檢査長秋山要

「祖父の遺稿集にあつたのだけれどー」と古文書勉強会の李家（りのいえ）さんが名井九介（みょうい きゅうすけ）博士の講演記録をくださった。

昭和四年六月十一日、佐原中学校忠敬記念会での講演である。この忠敬記念会は大正二年（東京帝大教授・長岡半太郎博士講演）から始まり、昭和二十二年まで続いた。

芳名録のユニークな署名の主、昭和十六年に再びお訪ね下さった方が、友人のお祖父さまであったのだ。彼女と私は、赤い糸ならぬ面白い糸で繋がっていたのである。

七十五年前なのに、とても得てお話しで楽しく読ませていただいた。御諒解を得て紹介させて頂く。

（伊能 陽子）

伊能忠敬翁の偉績を偲びて

名井 九介

私が御紹介にあずかりました名井であります。別に伊能翁の事蹟について研究した事もないで、最初は辞退致しましたが、別に人間でないで閒な身でありますから参った次第であります。

先年聖上陛下が攝政時代に北海道に御臨幸の折、忠敬翁の蝦夷の測量図について御説明申上げたことが動機となつて、翁の事蹟について書いたものが御当地に伝つて、私が御招きを受けたと考えます。先ず順序と致しまして伊能翁の経歴を御話致します。これは御当地の人は皆御存知の事と思いますから簡単に申上げて置きます。忠敬翁これは

「タダタカ」と訓むのですが一般には「チュウケイ」と呼ばれて居ります。百八十年前延享二年上総国山武郡片貝に生れまして十八歳の時当地の伊能家の養子となつて家政を治められ、五十歳迄は佐原に留つて居られました。

この間に独学は兎も角、正式に天文測量を学ばれた事蹟はありません。五十歳の時家を子に譲り翌年当地を立つて江戸に上り、幕府の学者高橋東岡に就て天文曆学を学ばれました。五十六の年宝暦十二年始めて蝦夷の測量を思いつた東南海岸の測量を丁へ、蝦夷の測量は其年限り中止して、翌年よりあと二年というものは伊豆より奥羽の海岸の測量に従事されました。其時師匠東岡はなくなり、息子景保の紹介で幕府の老中にこの測量図を差出されましたが、當時伊能翁は浪人であつたので、その図を將軍の上覽に供することは容易でなかつたと見えまして、將軍家斉は図面のひろげてある大広間の前を通過に託して之を見たとあります。兎に角、本州の半面の形が明瞭となつたわけであります。そこで初めて幕府当局より認められ、天文方に採用されて幕府の役人となられたのであります。これ迄個人の測量で費用も大体自費であったのだが、この後よりは幕府の役人として測量される様になります。非常に便利を得、其後は順調に進みました、其後十一年たつて七十一の時、文化十二年に自ら伊豆七島を測量しようとしたのであります。その時は余程の老齢で門弟も家族もこれを止め、門弟のみが測量したのであります。後三年間、図面の整理をして最後幕府の命を受けた日本奥地全図は未完成のまま亡くなられたのが文政元年、江戸でなくなられました。其年は頼三陽が九州で有名な「筑水を下る」の詩を作った時で、又「ナボレオン」がセントヘレナの孤島に流された時であります。

文政四年、門弟により地図が全部完成され、これを幕府に献上し、初めて喪を発しました。此日本輿地全図は明治六年宮城出火で焼失しましたので、伊能家に副本が残っていたものを政府に献納しましたが、其地図も大正十二年の大震火災で東京帝大の図書館で再び焼失し、今日に残っているのは複製されたもののみであります。明治十六年正四位を贈られ明治二十一年芝公園に初めて記念銅標が出来、後大正八年佐原に銅像が出来ました。

是れより蝦夷の測量の事を少し詳しく述べます。調べによりますと忠敬翁の蝦夷測量の目的はまだ外に一つあつた譯であります。即ち緯度一度に対する子午線の長さを決定しようとしたのであります。これをするには九州方面に向うのと蝦夷の方向に向うのと二つの途がありますが、九州は當時各藩が割拠していて容易でなく、然るに蝦夷は幕府直轄の時代で測量が容易であるというので蝦夷へ向うことになりました。これは高橋東岡の斡旋によるもので、私費を以て測量するといふことで願い出て許可を得たのであります。

当時の日誌によれば、出發は寛政十二年閏四月十九日、太陽暦で本日の記念日六月十一日であります。その一行は門弟二人、庶子秀藏、工夫二人に自分を合せて六人で、機械の運搬等は途中宿場人足の手によりました。奥州街道を進み青森に着いたのは五月八日、三厩に着いたのが五月十日、江戸を立つてより二十一日目であります。そこから函館に渡ろうとされました。天候が悪いため八日間三厩に滞在、十九日に出発し又風のため吉岡に着き二十一里を歩いて函館に着し、ここに六日間滞在されました。これは天候と準備のためであります。これより仕事に着手されましたが、江戸より来た工夫の一人は昼夜の仕

事に疲れ病気を口実に暇を頗つて江戸に帰りましたのに、幼年十五歳の秀藏は終始一行に加はつて行動を共にしております。

第一日は函館を立つて間繩により距離を測りましたが、時間を要するので第二日よりは歩測に改められました。こうして東海岸を伝わつて行かれたが、その困難は想像するに余りあつたろうと考えられます。鉋路を経て根室に行く筈であったが、幕府の役人が西別の方に居ると云う事で西別の方に行かれました。着かれたのは八月七日であります。ここから引返して途中、雌阿寒雄阿寒山等を測量して、九月十七日松前まで来、其翌日午前、大島小島を測量し風の都合で、午後直ぐ出發されて三厩に着き、帰途も奥州街道を測量し十月二十一日に江戸に着かれた、往復日数百八十日であります。

当時は、三角測量法は西洋でも漸く始まつた位で日本にはまだ伝わつていなかつたので、海岸線に沿つて測量したのであります。また当時の日誌に依れば「往古より遙か遠事を津輕領外ヶ浜より云伝りければ外ヶ浜をなん生涯には行難しと見えける。況して外ヶ浜より大海を往来しけるに供したるもの四人とも一日の病もあらで無事に帰府しぬるは誠に台命の辱と祖神の靈にあらずんば何すれば如斯ならんと難有感じたる」とありますのでその困難の事情が想像されます。

然し北海道は當時海岸だけは漁場の関係で人が相当におり、割合に開けて野宿等は割合少なかつた様であります。

此時の測量に翁の自費で使つた金は八十両余りで、幕府から賜つたのは僅に二十両二分であります。更に翌年残りを測量するつもりであつたが、前年測量の経験で費用と時日を要する関係もあり、又千島

の捕捉か国後で月蝕の観測をする爲、幕府に船一隻の給与を請うたが許されなかつたので、これを止めまして夫れから内地測量に転じたのであります。それで蝦夷の測量はどうして出来たかと云うに、常陸の人、間宮林蔵が伊能翁より測量術を習い、実測した材料を江戸に送り文化二年頃翁の手によつて完成されました。即ち蝦夷の図は翁と間宮林蔵の合作によつて成つたと云つて良いのであります。

ここに掲げたる元禄十三年（一四八年前）天明五年秋（一四四年前）天明七年（一四二年前）の蝦夷の図は見取り図で殆ど北海道の形をしておりませんが、伊能翁の測量図は今と大差がありません。是れは地球は円い球の様なものであると云う事が判つてゐた爲、今日の如く経緯度でやつたので大きな誤りがなかつたのであります。即ち天体測量を併せ施行したので、日誌に依れば晴天の日には毎夜三、四星、多き時は二、三十星を観測したとあります。如何に其事業が不眠不休の仕事であつたかが判ります。

伊能翁の測定に依れば、始めは緯度一度間の距離を二十七里と定めたものを、追々内地測量の結果、後には二十八里二分と改めてあります。それを現在の参謀本部の測量に比べて見ると殆んど差がありません。殊に三十一度から三十六度の間は全く一致しているのであります。是れは全く距離測量の精確なる結果であります。當時江戸の享保尺は今より伸びており、京都の又四郎尺は縮んでおりましたが、翁は測量の始めに是を折衷して用いる事に致しました。今日の度量衡法の一尺を一米の三十三分ノ十と規定したのは、伊能翁の折衷尺が基準となつてゐるのであります。

もう一つ磁石に就て申上げます。磁石が南北を完全に指さぬことは諸君も御承知であります。伊能翁は真に南北を向くと言われております。是れは違つておりますが、当時の磁石が殆ど南北を指しており測量の方では正しかつたのであります。翁の地図は大中小の三種であります。大図は三万六千分ノ一で二百十四枚、中は二十一万六千分ノ一で八枚、小は四十三万二千分ノ一で三枚、是れは前述の如く正副二通共焼失してしまいました。

以上の様にして翁は五十六歳より七十四歳まで測量及製図に従事して、此大事業を完成されましたが、今日考へて見ますと仲々容易な業ではありません。翁の如き非凡な人で始めて出来たのであります。

然らば、之を全部独力でやられたかと申しますに、相当の援助者があるのであります。第一は師匠の高橋東岡であつて、此人が總て指揮をなしたのであります。第二は東岡の子息景保が援助しました。もう一人は大阪の富豪で間重富と云う人。これは天文曆学が好きで寛政暦の改正に東岡と共に參與し、伊能翁に測量機械に就いて非常なる援助を与えて居ります。

この様に学問上の先輩の援助が大いに興つて、力あつて今から百三十年前からも立派な物が出来たのであります。

私の述べる所はこれで大体終りました。次に感想を少しく述べようと思ひます。

第一に感じるのは伊能翁が非常に晩学であります。人は若い時でさえも学問に身を入れずに暮す人が多い中に、ただ伊能翁は五十一歳になつて始められて、而も曆学天文学と云う壯年時代でも

難解の学問をやつたと云う点であります。此点だけでも、古今稀なる非凡なる人と云わねばなりません。

第二は測量と云う山野を跋歩して行かなければならぬ仕事を、老齢になつて思い立つて、是を完成された事であります。是れは壯年の時出来る仕事で、而も交通不便の時代に少數の人で、かかる大事業を短年月の間に完成せられた事は殆ど想像も及ばぬ事であります。然らば身体は極めて強壯であつたかと言うと、夫れは普通の人より弱かつたようであります。

第三は幕府の待遇が悪かつたにも拘らず、かくも偉大なる事業を完成された事であります。伊能翁は十人扶持であります。十人扶持と云えれば役人では判任官のビリか又は雇位であります。然し伊能翁の仕事は学理を実地に應用するのが目的で、物質を超越した精神的事業であります。今の物質的の世に於ても、此精神だけは持つてもらいたいものであります。私は道楽に囲碁、謡曲をやりますが、當時謡曲で観世に三百石を与える事に三十石を与えた時代に於て、一面には科学者に対する保護待遇の薄きには又驚かざるを得ません。よく人は、日本人は独創力がない、独創的な事は出来ないと申しますが、決してそうではありません。素質に於て外国人に劣つて居るのでなく、唯スタートが遅れたのであります。オリンピックの競技に於ても日本マラソンに万丈の氣を吐きました。追いついたら抜く力を持つて居ります。

今、暦について西洋と比較して見ましよう。暦は、昔は東洋の方が、歐洲よりはすつと進んで居ります。支那では今より二千余年前、漢の

武帝の時太陰暦を作り、一年を三百六十五日四分の一として居ります。此暦が日本にも行われましたが、歐州ではそれより五十八年後、かの有名なシーザーの時代に初めて一年を三百六十五日四分の一としました。

今日文明国に行われて居る暦はグレゴリー暦で、一年を三百六十五日五時四十八分四十六秒として、四年目に一日の閏を置き、四百年の間に三日引くと云う風になつて居ります。

次は数学であります。高等数学に微分積分というのがあります。これがなければ物理学、工学等は今日の如き發達は難いのであります。それはニュートンの発明と云われて居ますが、実は當時又独逸でも同時にライプニツクが発見して居ります。然るに近年の研究によりますれば日本でも同時に関孝和が発明して居りまして、この方がニュートンより優れて居つたと云う事であります。関孝和は徳川家光時代の人でニュートンと同年に生れて居ります。不思議にも世界の東西で期を同うして発見されたわけで、我々は此点に於ても大に意を強うする次第であります。夫れならば、どうして日本が後れ外国が進んだかと云いますに、外国では微分積分の発明が動機となつて、独逸、仏蘭西の大陸派と英國派との間に数学戦争が三十年も続き、其爲非常なる発達をしたと云われて居ります。然るに日本では学問芸術に秘伝と云い子相傳といい、容易に外部に漏らさなかつたのでありますから、後の人々は皆新しくやり始めて、外國の様に他人の研究した後を引き続いてやると云う事は出来なかつたのであります。是れが封建時代の弊風で、大いに我国の学問芸術の進歩發達を阻害した一の原因であります。次は開門についても同様であります。開門は其處の横利根にもありますが、是れは東洋が最も早い六百四十年前には、支那には早や出来て居

り、日本に於ても荒川の支流芝川の上流には閘門があつて、是れは伊沢爲永と云う人が造りました。實に英國よりも三十年も前のことあります。

此様に素質は決して劣つて居りませんが、封建の制度、鎖国の政策の爲に学問、殊に科学的方面の発達を妨げられ、今猶外國に一籌を輸するのは甚だ遺憾の至りであります。然し今日は、学問は開放的であります。吾々は伊能翁の如き精神と努力とを以て一生懸命に進んだら、遂には模倣の域を脱し、独創的にも外國を凌駕する事は困難とは考えません。

最後に翁の種々逸話を述べる積りでありますたが時間の都合上やめまして、翁の狂歌を御知らせ致します。

文政八年彗星が出た事があつて非常に当時の人を迷わせたものであります。これを戒めて次の如き狂歌があります。是を御笑い草まで御披露致します。

君が代や 草木も靡く 放屁星 天下泰へい ぶうん長久

昭和四年六月十一日佐原中学校に於て

(編集部注 文中、旧字及び送り仮名は一部改めました。)



【京都新聞 三月一六日】

伊能地図の修復完了 日本写真印刷 デジタル保存も

日本写真印刷（京都市中京区）が進めていた伊能忠敬の日本地図の修復作業が終了し、十五日、本社で公開された。

修復したのは、伊能忠敬一行が江戸期に作成した「伊能中図」の北海道から九州までの全八枚（縮尺二十一万六千分の一）。九州南部と奥州部分が破れ、傷みがひどかつたが、裂け目を和紙の繊維でつないであてがうなど、江戸期に複写のために開けられた地図の針穴をつぶさないよう地道な手作業で復元した。

原本の和紙を分析し、こうぞ紙と中国製の竹紙を使っていることが分かり、同様の紙を特別にすくなど工夫も凝らした。



京都発の修復技術で見事復元された「伊能中図」

修復した地図は、ペンチャード企業の三次元メディア（草津市）と協力し、デジタル保存した。会見した伊能忠敬研究会の渡辺一郎代表は、「当時の姿で保存することができ、感謝している」と話していた。原本は四月十七日から神戸市立博物館で公開され、デジタル保存地図は十七日に府総合見本市会場で展示する。

待望の未公開忠敬書簡

刊行始末

忠敬先生には申し訳ないけれど

伊能
陽子

一九六一年、伊能忠敬の遺品は千葉県佐原市に新設された「伊能忠敬記念館」に収められた。そして史跡・忠敬旧宅を佐原市に引き渡す際に残りの反古類は東京・世田谷のわが家へ移された。それから二十年ほど納戸の隅に積まっていたのだが、教材を求めて来訪された小学校の先生の「貴重なものがこんな状態で…」という一言がきっかけになり、私は反古の整理という大変な仕事にかかることになったのである。

解説して並べることにして、研究会会員の伊藤栄子さんの大きな力を借りた。これをたたき台にして、ご意見を寄せて頂きたい。

一九七三年刊行の「伊能忠敬書状 千葉県史料 近世編文化史料」には、国的重要文化財に指定された忠敬の書状百六十通が収められているが、反古の中のものは殆どが手紙の下書きである。当然、雑に書いてあるので読みにくく、宛て先も日付も無いものが多い。内容も親しい間柄なら尚更省略があるので、解説をつけることもできない。その上、短い下書きを脈絡もなく継いでいる形狀もあり（多分、後年誰かが整理しかけたのだろう）書簡とは言えない覚書もあるが、とりあえず忠敬の筆と思われるものをまとめてみた。したがって、解説のないものも順不同にならべてある。

幸い、安藤由紀子さんという最高の協力者を得て、老後の楽しみとばかり、一人で反古の鐵を延ばし文字を読んで世田谷伊能家文書とし、六百点余りの古文書を袋に入れ終わったら、七年が経っていた。

書簡というものは当然受け取った側に残るものなのだが、忠敬の場合は全国各地の測量先から、佐原や江戸の家族、知人に当たった手紙が多く、筆まめな忠敬ゆえに、これだけの数が残っているのだと思われる。また、後の人人がこれ等を大切に保存していたことには、先祖への敬愛の心を感じる。

二百年余り経つていてはいえ、書き散らした下書きを公開するのは何となく申し訳ない気もするが、手紙の中にその人の人間性をくみ取ろうとすれば、下書きがもつとも適當かと思われる所以、苦笑いのチユウケイ先生に御詫びしつつお目にかける次第である。

最後に、伊能家以外に所蔵されている書簡もいくつか集めた。まだこれら之外に世間に散在している未公開のものも多いと思われる所以、コピーさせていただければ活字にして付け加え、完全な「未公開書簡集」に近づけて行きたいと願っている。

書状にみる忠敬の日々

伊藤 栄子

未公開書簡集から

伊能家に伝えられた書状下書き、各地に現存するあまり知られていない書簡、ここでいう未公開書簡を眺めて見ると日常の出来事ばかりではなく、天文書の写し、暦算、暦書に関するもの、また年貢米、伊能家の家業である酒造家としての酒の積み出し、米の買い付け、暮れの金銀出入から、縁者の縁談の身上書まで、まことに多岐にわたっている。

反古と考えられた書簡はすべて下書きで、所々文章の書き直しもあり、長文から二、三行の贈り物の添え状に至るまで、種々雑多な書状である。まさに忠敬の生活そのものが、凝縮されて残されているといつても過言ではない。

この時代、紙は貴重品で、大変高価であった。古書を見ても本の余白として前後についていた白紙は、庶民の手にわたる本では殆どが切りとられている。伊能家でも紙をとても大事に使っていた。無駄なく隅々まで使うほか、来信の裏を下書きとして利用し、それらがそつくり残されてきた。そのおかげで今私共は、当時の忠敬さんの生活の一面を知ることができる。全体は反古のようなものだけれども一記録として考えると、情報のつまつた宝の山である。

中でもB-83の短い書状を読むと、忠敬もやはり普通の人で、人並みに孫の教育に気遣い、手を焼くことは、人後に落ちないことがわかる。飯米積入れやら、中宿一件、下飯田村への貸し等、これは佐原から頼まれたことへの返事であろう。「亀しま」とあるのは、亀島町で、忠敬の当時の住居のあつた所、名を出さなくても、町名のみで家人には差出人がわかる。

□京都に暦書の追加注文を依頼

(前文欠落)

A
271-8

世田谷伊能家蔵

追加

一、京都注文暦書之中

古暦便覽 一冊相届申候

暦算啓蒙 当時切ものにて

来春出版候条

相分り申候

一、律襲暦

一、観象暦 二部ハ

御注文御失念と存候

今以不被理追候ハバ

一、授時暦俗解 中根元圭作

一冊

ペ 四冊と被存候 後巻二冊

一同ニ御注文被仰遣可給候

御世話とハ存候へ共、當時

暦算ニかゝり居候問無拠

申遣候

一、古暦御写し被成候哉

兼て申談候通毎月の

中と節と一ヶ年ニ廿四季ニ御座候

四季土用と毎月ノ大小

日月食ノ時刻ニテ宜候

此度

京より下り候古暦便覽も

貞享元甲子より寛政十四

年迄ヲ中節土用大小

日食月食ヲ記し候得共、

宦暦と引き合足候得ハ小差

有之候 正徳より以来ハ

古暦則宦暦ナリ 不残揃申候

何卒貞享二（又ハ貞享元よりハ別てよし）

より元錄迄ヲ節中

土用大小日月食ハカリ

写し取中度候 摄兼候ハヤ

貞享二年か三年か

元錄ニテ一二年ニテも宜候

扱、吾朝も貞享元甲子

迄ハ宣明暦ヲ用ひ候由

依之二日ノ違出来申候ニ付、

貞享暦ニテ改マリ候間

貞享二より正暦のよし

貞享以前ハ暦術の見合ニハ

難相成と申事ニ候 宜

御都合頼入候已上

盛右衛門殿

直右衛門殿

新兵衛殿

○大谷亮吉が『伊能忠敬』のなかで引用している書簡下書きである。

忠敬は東河と号して、盛右衛門（娘・イネの夫）、直右衛門（息子の景
敬）、紙屋新兵衛にあてている。三人は江戸にいるらしい。

佐原で暦学を自習している忠敬から暦書注文の手紙である。暦の計算をしており必要なので頼むといつて。この時代、暦書を注文する先は京都であった。「古暦便覽」は数学者吉田光由が、元和、寛永、正保期に数回版行された「古暦」を編纂したもの。その後も数人により改訂されたという。「これきべんらん」と読む。

一方、何處からか古暦を借りて写させていたらしく、写し取る部分を指示し、意見を述べている。三人で手分けして写本を作っていたかも知れない。紙屋新兵衛は、測量を始めてからは地図用紙を一手に引き受けており、奉公人の世話などもおこなっていた。

授時暦俗解は、正しくは「授時暦經俗解」で、暦算全書の解説書。著者は中根元圭（一六六二—一七三三）。中根は江戸中期の暦学者で、徳川吉宗の命で「暦算全書」を翻訳した。同書は西洋天文学の成果をとりいれて、清の暦学者梅文鼎が著した暦書で、享保二年（一七二六）に輸入された最新の暦学書。

中根は近江の医家の出身で、通称は丈右衛門、号を「律襲」という。（伊藤）

東河

閏十八日

□九州第二次測量の際の書置き

A-166 世田谷伊能家蔵

一、孝ハ仁義の根元ニ候 親ニ順
家事を治、子孫長久を心かけ候儀
第二ニ候 兎角質素ニ行々諸商売を
相休、貸金等も地頭村貸ハ相止候様
可被成候 此度妙薰、おりてへ申含
置候間、我等と被心得諸事相談可
有之候

一、我等方より其許へ年々ニ預ケ置候金子
猶又此度も相渡し候金子共、年々ニ
七月と極月ニ利足妙薰、おりてへ

相渡し、立会封金ニ可致置候 尤體成

質地借（ママ）付方も候ハド右両人篤と承知

之上貸付、元利返済次第封金ニ可致候

一、此迄本家へ預ケ置候金八百両之事、
兼て其許取添被成置候屋敷地面、御配當

被成候地所、猶又金高ニ十分相当候様

相改兩人へ承知為致、高帳も御仕分

置可被成候 則当家長久之用意ニ候

余ハ兩人へ申含置候

文化八未年十一月

伊能勘解由印

伊能三郎右衛門

○本書状は、文化八年十一月に長男景敬に宛てたもので、九州測量が
二回に分けて行われたとき、一回目と二回目の間すなわち「中帰り」

一、将、野生義も御兼知被下候通、一昨戌年迄二
國々測量相済、夫より右地図ニ取掛

中に書かれたものである。九州第二次測量は十一月二十五日出発であ

るから、その直前であり、遺書の一種と考えて差支えない。出発前、娘の「妙薰」（いね）と嫁の「りて」に言い含めておいたことを、改め文章にして佐原の長男三郎右衛門に送つたものである。忠敬はこのとき六十七歳であった。

子孫長久のためには質素に暮らし、ゆくゆくは商いも休み、金貸しも領主宛てなどは止めるよう指示している。忠敬から長男へ毎年預けたる金子の利息は三人立ち会いのもとで封金にするよう命じている。息子の三郎右衛門を父はあまり信用していなかつたらしく、いちいちしつかり者の娘と嫁の立ち会いを求めている点が注目される。（伊藤）

□小嶋九右衛門宛（文化一四年一月）

A-185 世田谷伊能家蔵

一対數表のお礼と近況報告

貴翰辱致拝謂候 如仰逐目冷氣

相慕候得共、愈御安全被成

御座雀躍不少奉存候 随て

愚老無別条罷在候 乍揮御安意

可被下候 然ハ年来御懇意ニ

御世話被成下候對數表、皆出来五冊目此度

降屋氏へ御下し被下、千万辱落手候

外ニ表紙角廻リニ小切も御添被下候ニ付、

早速先達て御持參被下候四冊目も仕立候間、全部五冊共

相揃永重宝ニ可仕所存、大慶仕候

罷在、然所當閏八月初より江戸量地

被仰付、十月下旬迄測量大概ニ相済

當時仕立相掛候 此も當正二月迄

仕上と奉存候 国画図皆出来ハ何れ來寅年迄と

奏存候 両図共成就之上ハ

藏板を相願可申哉奉存候 若し成就候ハバ

追々可入高覽候

略暦入 小嶋九右衛門様

○依頼していた対数表五冊の筆写が完了し、入手した札状である。後

段で文化一三年の江戸府内測量を一〇月におわり、地図を当二月までに仕立てるとか、国図を來寅年（文政元年）には、といつてあるから、

文化一四年（一八一七）一月の書状である。

死没一年余り前の、この時期になつて対数表を求めていた。割円八

線対数表は、いつも使っていたはずであるが、どのような対数表を求めたのであらうか。

全体の日本図を翌文政元年までに仕上げるといつており、仕上げたら出版をお願いしたい。出来上がつたらお見せするという。

ろう。

参考・会報35号の日経新聞記事

□三治郎儀我等手ニは余り申候

B-15 世田谷伊能家藏

両方共無別条致大慶候

一、内蔵ニテ岑尾女ノ筆筒の内七品

紛失の事ハ敬藏より可申遣候 依之

此以後内蔵ヘ預り物ハ相断申候 其代（カワリ）ニ

岑尾宅へ鼠不入の大押入こしらへさせ

候様ニ申付候 尤此方よりも藏かし質と

心得、金壱歩ハ合力可致申聞候 此上共ニ

か様なる預りものハ致間敷候

一、飯米小遣等之儀、先達而申進候通

大減ニ候

一、其御許何角御心配察し入候 何分

酒造店卸能々御取極可被成候 本家

第一之所ニ候 仍て其御許ハいつまで

致逗留候ても宜候得共、只三治郎儀

来月ハ佐藤捨藏へ遺度候 逆も

三治郎儀我等手ニは余り申候 兎角

間三合セ其日切ニて何程教訓致候ても

ところが、何か重大なトラブルが発見され、計画を実現することができなかつた。たぶん、地図描画上の問題点だつたろう。見方によつては、忠敬の死期を早めるほどのショックだつたかもしれない。小嶋九右衛門は京都の数学者で、暦を版行する土御門家の関係者。（渡辺）

本状は、忠敬が一八一八年にはすべての地図作成を終え、出版も予定していたことを証明する貴重な書簡である。地図完成の見通しについては、明治の伝記作者・大谷亮吉も紹介しているが、出版の意図があつたとは、これまで知られていない新事実である。

著えられもないことを忠敬がいははずはないから、伊能図は幕府の秘圖だつたと、いう通説があやしくなる。たまたま、忠敬の事績を受け継ぐ人がいなかつたので、刊行されなかつたという推測も成立つだ

直ニ変じ申候 能々三三治郎ハ六ヶ敷物（ママ）ニテ

哲之助とハ大相違の段、我等ハ平生

心痛致候旨御嘶し可被成候 仮令佐藤

内弟子へ入用カヽリ候共、佐原暮し方ヲ

減候ても御兩人共御決心可被成候 大切

之所ニ候 以上

三月十六日

妙 薫 殿

勘 ケ 由

○伊能妙薰（いね）宛 文化十四年三月十六日

岑尾という人から伊能家の内蔵に預かっていた品物七品が紛失した件に付き、今後蔵への預かりは一切やめるよう指示した書簡であるが、後半、忠敬の孫への教育ぶりが面白い。

このころ、長男三郎右衛門は亡くなつて孫の三治郎（忠誨）が跡継ぎであつた。「三治郎を来月佐藤捨蔵（佐藤一斎）へ預けたいと思います。三治郎はとても私の手には余る子です。とかく間に合わせ、その日かぎりで、いくら教訓を与えても、すぐに元へ戻つてしまふ。また三治郎はむつかしき子で、哲之助（弟）とは大違いです。例え佐藤への入門で費用がかかるとしても、佐原の暮らし方を減らしてでも、ご兩人（娘と嫁）ご決心下さい。これは大切なことです」せつかちな忠敬のことだから良い教師だったかどうかは疑問であるが、孫は教育じじの思うようにはならなかつた。

（安藤）

*この書簡集は、会報別冊として鋭意制作中です。
もうしばらくお待ち下さい。

伊能忠敬記念館 第三五回収藏品展

会期 三月三〇日～五月二二三日
内 容 国指定重要文化財「伊能忠敬遺書并遺品」の中から青森県方面の伊能図と、昨年四月に伊能家から寄贈された現在の兵庫県域の下図と忠敬が現地から提出させた絵図数点が公開されています。これまで二ヶ月ごとに順次公開してきており、その三五回目にあたります。

展示資料

- ・自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第26～28 重要文化財・館蔵
- ・奥州街道図 第9～11 重要文化財・館蔵
- ・自江戸至奥州沿海図 第19 重要文化財・館蔵
- ・折衷尺 大・小 重要文化財・館蔵
- ・下図（撰津国神戸村～幡磨国正条村） 伊能淳氏寄贈
- ||彩色した伊能図のもとになった地図
- ・参考絵図（播磨国高砂組別府村他五ヶ村） 伊能淳氏寄贈
- ・参考絵図（播磨国加古郡荒井村） 伊能淳氏寄贈
- ・参考絵図（播磨国揖西郡野瀬村） 伊能淳氏寄贈
- ・参考絵図（播磨国相生町付近） 伊能淳氏寄贈
- ・参考絵図（播磨国加古郡宮西村付近） 伊能淳氏寄贈

テレビ番組「時空探検！京都の美と匠」

千二百年の古都サイエンスの旅に伊能図が登場

4月11日（日）日本テレビ系列で午後三時から放映された。

京都で発見・伊能忠敬の三つの秘密とは。京都に本社があり今回のペイレ図の修復にあたった日本写真印刷の人木さんたちの研究からわかつたことを紹介していく。第一の秘密とはペイレ図には $0 \cdot 2^{\circ}$ の針穴が数多く残されている。これはなんだろう？複写した時に出来た針穴で地図の裏までとおっている。地図複写の創意工夫であると渡辺代表が解説する。「技術立国日本の原点である」。第二の秘密は地図のために作られた特殊な紙である。紙質は三層構造で竹紙とこうぞ紙が使われており、美しい地図の秘密はこうしたところに苦心の跡が残る。第三の秘密は地図に☆マークが？正確な地図作りには天体観測が欠か

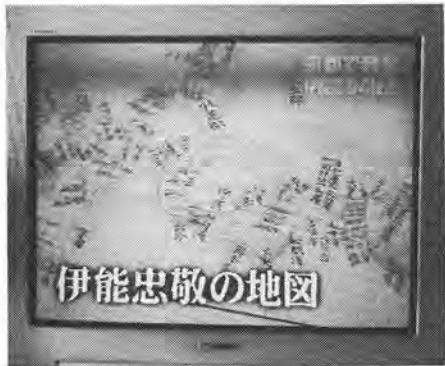
せない。「観測地点表示」が☆印であるとトーキー映画時代の活弁調で解説が。伊能地図を生んだ京都の天文学にも話題を拡げ、日本の中線の痕跡が京都の円光寺に残っているのも紹介された。
竹、西陣織など京都の輝かしい歴史にたくさんの方の先人の知恵が科学として紹介された番組で、「遠くへ行きたい」のテレビマンユニオンの制作で丁寧に作られていた。

伊能中図が細密データ化

【朝日新聞 二月七日 大阪版】



デジタル化が進む伊能中図の原図=6日午後、京都市中京区の日本写真印刷で



フランスで見つかった伊能忠敬の日本地図の修復を進める京都市中京区の日本写真印刷で6日、地図をデジタルカメラで撮影し、データ化する作業が始まつた。縦2.5m、横1.6mの8枚の地図を原寸大で約2億画素の画面で復元。これまで判読しにくかった幅0.2°の街道の線や、3°角の文字も鮮明に復元される。

デジタル 伊能中図

京都の印刷会社

伊能忠敬が19世紀初めに作成した8枚組み（縮尺21万6千分の1）の地図で「伊能中図」と呼ばれる。フランスで95年に確認され、一部損傷が激しいため、昨年11月から同社で修復中だった。

4月17日に神戸市立博物館で開幕する「伊能忠敬の日本地図展」で公開される予定で、その後、各地で展示されたあと、フランスの所有者に返還される。渡辺一郎・伊能忠敬研究会代表理事は「デジタル化は伊能研究を進める上で意義は大きい」と話している。

細密データ化 街道・地名も鮮明

糸魚川事件始末

臼井 良作

変更願いたいという申入れがあった。

編集部注 本稿は渡辺代表が忠敬研究の先輩である白井氏（故人）より託された原稿です。若干加筆しましたが、いわゆる糸魚川事件を判りやすく解説されています。

伊能忠敬の一行は通行した村々の協力を得て全国の測量を順調に進めたが、その中で唯一一つ詳細に記録されているトラブルが越後国糸魚川での事件である。その経過は忠敬の測量日記に詳しく書かれたほかに、地元糸魚川の庄屋日記（上越市渡辺慶一家文書）が千葉県史料に載っている。これらを対比させてこの事件の解説をまとめてみた。文章は堅苦しい原文をやさしく改めてある。

享和三年（一八〇三）八月八日、越中国泊町（富山県下新川郡朝日町）を出立した忠敬一行は、越後国に入り市振で昼食休みをとり、歌村に午後四時頃到着。本陣名主渡辺七郎右衛門に止宿した。市振も歌村も（新潟県西頸城郡青海町）共に御料所、つまり幕府直轄の天領で代官大原大蔵の支配地であった。明九日は糸魚川で昼食、梶屋敷で止宿の予定は既に先触で達してある。ちょっととしたトラブルがあつたのは次の三点であった。

一、歌村宿舎に挨拶に来た梶屋敷村役人から、明晚止宿予定の宿舎は場所が狭く夜間測量の為に所要の空地がないので止宿先を糸魚川町に

折よく糸魚川町の問屋八右衛門も来合せたので、忠敬は右の話をしで受けられないという返答。糸魚川町は家数も千軒程もあり、測量場所は往来を使つてもよし、寺院などもよし、何とか取り計らってくれるよう話したが八右衛門は承知しない。そこで忠敬はやむをえず夜間測量はあきらめ予定通り止宿は梶屋敷とすることにきめた。この日忠敬は持病の痰が出て健康がすぐれなかつたこともあり、右の八右衛門の態度に腹を据えかねるものがあつたに違いない。

二、続いて忠敬は八右衛門に海辺測量の手配を依頼したところ、八右衛門の云うには糸魚川領の内に姫川という急流があり、海際では川巾百間（約一八〇尺）もあつて渡船、川越等は無理だから、海際より四五丁上流の本街道の渡しを通行してもらいたいとの返答であった。

海岸線を正確に測量するのは忠敬の大目的であり、是まで四カ年もの間諸国を回り測量を続けたが海際を渡川出来なかつた所はどこにもなかつた。出羽国酒田湊、新潟信濃川口、東海道筋では大井川、天龍川、安部川等いずれも差支えなかつたのに、姫川というのはそれほどの大河でもなく、なんとか海際に渡船を出すよう再三話したが八右衛門は応じなかつた。

土地の事情に不案内のことだから、八右衛門がそうまで云うからにはやむをえないとあきらめ、翌九日の測量は歌村海際から始め、姫川の手前で本道に出て海際を離れた。忠敬はまず姫川を一覧しておこうと思つて本道の渡しを行つてみると、それほどの川ではない。川に沿つて海際まで下つてみると、海際はさらに川巾が狭く、流れも急ではない。間縄を投げても届くほどの川巾にみえたので、後から来る一行

に連絡し、本道の渡し場から船を引寄せて乗込み、間縄を引いて渡河

することが出来た。川幅は漸く十間（約十八尋）ばかりで八右衛門の云つたことはまったく偽りであったことがわかつた。測量御用にも差障る問題であり忠敬が立腹したのも当然である。

三、糸魚川領に入り、この町の入口で測量隊を迎えたのは町年寄一名だけであつた。昼食を鍋屋助左衛門でとつたが、その席にも右の八右衛門や町役人等は姿を見せなかつた。諸国村々を是まで測量御用で通行したが、其の所の領主の奉行役人等は必ずしも右の八右衛門等は公儀に対する勤めと心得たからである。糸魚川に限つてそうしたこととなかつたのは公儀を軽くみたもので言語道断のこと、その上昨夜の姫川の偽り一件は測量御用に差障ること、このまま捨置くわけにはいかないと云い残して糸魚川の昼食を終え止宿先の梶屋敷へと測量を続けた。梶屋敷は前夜の歌村と同様、代官大原大藏支配の御料所であつた。

トラブルというのは以上の三点であつた。翌十日が風雨で梶屋敷宿に滞留となつたので二日間にわたつて糸魚川町の町役人、問屋人右衛門らは心得違いの詫びを入れ、忠敬もこれ以上問題を大きくすることは避けて受け入れ、一件は相済み落着した。

以上は忠敬日記の記録を要約したものであるが、糸魚川の庄屋日記からみた事件の経過は次のとおりである。

右の第一点、止宿先変更一件は記述がない。第二点の姫川一件は、海際の通行は危険だから中止したほうがよいと返答したことは、忠敬

日記の通りである。問題は第三点であつた。

八右衛門が歌村の宿舎で集めた情報によると、忠敬測量隊を迎えるに当つて加賀領三ヶ国（加賀、能登、越中）では郡奉行、十村（加賀領独特の制度。肝煎大庄屋のようなもの）等が付添つて廻り、越後に入つても市振、歌村の御料所内でも先払を出し、村々では盛砂をし、掃除も入念にする等丁重なもてなしをしたということであつた。

糸魚川は譜代大名の松平日向守、石高一万石の知行地であつた。糸魚川松平家は定府といつて参勤交代しない大名で、この町に陣屋を構えていた。八右衛門は町役人と同道してこの役所に出向き、歌村で得た情報を報告して当領内の応待をどうしたらよいかを質した。すると他所のことは別、当領では手軽く取計らうべしとの役所の仰せ。八右衛門らは再度、それでは安心だからお役人様も会所迄御出役願いたいと願つたが、同様の返答で、出迎え、見送り共に町年寄一人、庄屋一人が出ればよろしい。もし何か云はれたら役所からの指図であると答えよ。という重ねての仰せであつた。

鍋屋助左衛門での忠敬一行八人の昼食の献立を次のように記している。

皿

木くらげ 魚 大根

手塩皿 ならずけ 茶飯

花かつを 平 おぼろ

中盛椀 松茸 むしかい 鮓

芙蓉

中皿 小鯛

御酒

中鉢

右八人前御賄申上候

尤木賃米代として百八十文相払候

忠敬は姫川一件に大変立腹の様子で弁解も聞入れず、この旨を町役人から藩の役所へ届けたが、そのまま打捨てておけという役所の指図であった。

星食が済んだ後、測量隊の随員の一人、村津大兄が町役人九郎右衛門に対し、今日忠敬先生が通行されるにつき糸魚川町では先払、付添役人等も姿を見せなかつたのはどうしたことかと尋ねられた。それはすべて当役所の指図によるものであることを答えると、大兄はさらに、役所から指図がなくとも先触で通達したとおり町役人として差出すべきが当然と思うがどうか。と再度念を押された。九郎右衛門はその一件下役人に糺して返答すると答えると、大兄から、それなら今夜梶屋敷の旅宿まで来てしかと申開きをせよ。ということになった。

御用の儀有レ之候間、先刻勘ヶ由供先にて申

渡置候宿役人同道人差添、只今早々梶屋

敷旅宿迄罷出可レ申候

八月九日

村津大兄承候

糸魚川役人中

このような差紙も届き、糸魚川町役人が梶屋敷の宿所に到着したのは夜十二時。夜中ではあるが宿役人ども大勢来ておりますので、どうか今晚中に御願申上げ御許し願いたいと申出たが、その夜はそのまま差控え。

翌十日は風雨のため忠敬一行はそのまま梶屋敷に滞留となつた。梶屋敷宿役人も連れ添つて糸魚川町役人ら一同は、このたび糸魚川町役人はどうこうないが糸魚川藩の取計らい方の不行届が第一であると、御役所に對して憤つておるので町役人共も困惑した。そこで御役所ともどもお詫びに上つたらどうかとなつたが、お役所のこと故この場でどうしても決められず、早速糸魚川へ聞合わすことにして八右衛門は席を立つた。だが役所ではこんな申入れを聞入れず、町役人だけで問題をかたづけるという指図。伺いに出た八右衛門も帰り、庄屋二人と共に再度御許しを願つた挙句、忠敬の憤りも解けて、今回はその者たち用捨に及ぶ。つまり問題にしないで万事相済んだということになり一件落着した。

町役人一同も安堵して御礼を申上げたところ、忠敬から次のようない話があつた。

糸魚川町役人どもの心得違いのことは用捨とし、書付も取るべきところであるがその必要もなしとする。今回の測量という仕事は神武天皇以来かつてなかつたことで、糸魚川の役人たちはこれを知らなかつた故にこのような心得違いをしたものと思う。帰つたらこの趣きをよく役人たちに話して聞かせてやるがよい、ということであった。

糸魚川町役人たちは世話になつた梶屋敷宿役人たちにも礼を述べ、この日も帰着したのは夜十二時であつた。

こうして忠敬日記と糸魚川庄屋日記とを対比してみると、トラブルの根元は糸魚川支配の松平日向守知行所陣屋役人の対応であつたようと思える。ともあれこの一件は現地で相済み落着となり、後に尾をひ

く筈ではなかつた。

ところが糸魚川知行所の役人から江戸の領主松平日向守に事件の報告が入り、しかもその中に忠敬一行が測量先で幕府の権威を笠に着て威張り、賄賂などを取るといった中傷がなされたことから、現地で解決した問題が中央で燃え拡がつてしまつたのである。

忠敬一行は佐渡測量を終え三国峠から江戸へ向う途中、九月二十二日長岡近郊の六日市村止宿先で道中奉行、勘定奉行の触れ書を添えた天文方・高橋作左衛門からの書簡を受取つた。

天文方高橋作左衛門弟子伊能勘解由へ市野金助より油紙包状箱壱つ。右は差急ぐ儀に申遣候間、昼夜限らず早繼送り、尤途中にて見請次第急度相届くべし。

(後略)

亥九月十七日

兵庫 和泉 左近 飛驒 主膳 美野

市野金助油紙包書状は高橋先生の書簡であつた。読み下し文に改めて全文を示す。

わざわざ 態々申し達し候。其許海辺測量御用に付き、先頃松平日向守領分越後国糸魚川通行の節、村役人等取計らい不行届の儀これある趣にて、是迄かほど粗末なる取扱これ無く候。帰府の上申立つべき旨急度相断り置き通られ候由にて、其段日向守へ相聞え候。村役人其外共吟味これあり候所、粗末に取扱い候儀これ無く、外に御用向にて通行これある衆中同様に取計らい候儀にて、右躰断り請候程の事はこれ無き由に付き、其段日向守より御勘定所へ掛合これあり候趣承り及び候。尤も其許へ面会の上にこれ無く候ては主意相分り難くは候へども、何れ御用を申立てかさつなる申方に相聞え、以ての外の事に候。定めて召連の弟子中、不案内にて右躰の儀申達し候哉にもこれあるべく候えども、畢竟是其許自分に帰し申す儀にて輕からざる事に候。以來右等の儀これ無きよう急度相心得られ、召連れの弟子中へも精々申付候様致さるべく候。若し又、所役人の心得違にて御用向差支候筋もこれあり候はば、物和らかに御用の筋合申し聞かせ熟談致し候はば、如何様にも差支なき様相成るべき事に候。

其上にても村役人等無骨にて御用向差支え候にも、とりあえず熟談も成りかね候はば其所は其の便に致し置き、江戸にて申し立つべきなどの事は相断るには及ばず候。帰府の上委細拙者へ申し聞けらるべく、其節如何様にも取計らい方これあるべく候。何れにも其所にてとやかく申し達し候儀は堅く無用に候。是等の儀、以前にも申し達し置き候儀には候えども、前文の趣承り及び候に付き猶又心得の為態々申し達し候。

一、賄賂がましき品ども堅く受納あるまじく候儀は、かねて精々申し達し候儀には候えども、猶又よくよく相心得らるべく候。畢竟はいかつがましき儀これ無く諸事相慎み、御用と申す儀面に出

し申さず候様相心得られ候事肝要に候。

九月十六日

伊能勘解由殿

以上
高橋作左衛門

高橋作左衛門の書簡は別の封書でもう一通あった。原文のほうが深い味があるので前文同様読み下し文にして紹介する。

扱今便は別紙一件に付き態々書状出し申し候。糸魚川一件如何なる事にも候や。何れ江戸にて申立つべしと御申捨にて御通り候故、日向守以つてのほか驚き入り、早速役人ども吟味いたし候由。

畢竟、公儀御用と申すを懼れ候故、余儀なく御勘定所へ申達し候儀と存ぜられ候。御勘定奉行は中川飛驒守にて候。此の一儀御老中方へ申上げ候ては足下の身分にも掛り候事故、いまだ申上げには相成らず候。飛州（註、中川飛驒守勘定奉行）より秋山松之丞相遣し候由にて、松之丞小拙へ申し聞け候事に候。まず内分にて相済むべく候間、其段は御安心成らるべく候。松之丞申し聞け候にも、己來も右躰かさつなる事これあり候ては甚だ如何に候間、小拙より申し遣し候方仕るべき旨申し聞け候事に候。

小拙も承り驚入り候。よもや足下の御申しにはあるまじく候。召連の弟子の内、不案内の者これあり候て左様のこと申し候やと存じ候旨答え置き候。此の書状は足下切りにて御内見なられ、別紙は弟子衆中へ御見せ候て宜しく候。己來必々いかつがましき言葉出さざる様に精々御申しつけ候様、千万千万存じ候。此の御用も当年限りにて相済み候事にもこれ無く行末が大事に候。

又糸魚川の一件に付いては、若しくは賄賂筋を致さずと左様に申し達し候にはこれ無きやなど疑い候者もこれある由故、此の儀

をも別紙に認め候。此の事は決して足下に於ては気遣いなく存じ込み候へども、他の人々は左様には存ぜざるものに候。足下の清白の氣質これらに疑い御請け候も何とも残念に候。畢竟は権威がまようの事ども兼々御呴しも致し候事にもこれ無く、元来御存知の事にて申す迄はこれ無く候へども、即今天下の曆学者各眼拭ひ、足下の地図成就の期を日を算へ待ち候事にて、後世永々英名を御残し候事、此の時に候て又これをもって世上曆家の机上腐臭の故態を破り、精密の一家堅く相建て候も今の時にて、實に足下の一身天下曆学の盛衰に係ると申すべく候。

かほどの大事業の将に成らんとするの間、一小事にて万々一中絶に成り候ては何程の殘念と思し召し候や。糸魚川の事も江戸にて申し立つべしとの一言に大いに恐れ入り候故の事相聞け候へば、此の辞は己來は堅く御禁止成らるべく候。又人々も小拙が申し達し方かねて不行届の様存ぜられ候旨にて迷惑いたし候。

糸魚川の事も御帰府にて御呴承はり候はば定めて御尤もの筋にもこれあるべく候へども、彼方より先に御勘定所へ相達し候ては、彼方先手に成り候。跡より申す方何とやらん遅れ候様にもなり、且つ申訳のやうにも成り候て如何に候間、万々一熟談も成りがたく測量の差支に成り候はば御帰り後、如何様にも取計らい申すべく候。

然しながら公儀の御威光に候間、差支えの事はあるまじき儀と存じ候。当年は新手の人も御入り候間、別して御心付けられ候様と存じ候。

先ず今便は右の一事のみ貴意を得候。程なく御帰府成らるべしと日を數え御待ち申し候事に御座候。何分貴面を期し候。以上

九月十六日

伊能勘解由様

高橋作左衛門

(前略)

江戸でこんな騒ぎになつては露知らず測量を続けていた忠敬にとつては青天の霹靂ともいう知らせであつた。すぐさま返書を認め経緯を作左衛門宛に報告すると共に、さらに詳しく道中でこの一件について報告書をまとめた。内容が重複するので江戸で提出した報告書を紹介する。

三国峠を越え高崎を経て板橋宿に着いたのは十月七日昼時であった。そこへ高橋作左衛門から使いの者が来て次の書簡を受取つた。

永々御旅行何の御障りも御座無く御一同御無異御帰着、目出度き御事と存じ奉り候。(中略)

扱糸魚川の一事、御返書にて委細相分り大いに安心致し候。早速御返書は秋山へ相渡し、御勘定奉行へも見せ候筈に御座候間御安心成らるべく候。猶委細貴面申し述ぶべく候。(後略)

十月六日夜

作左衛門

(中略)

勘解由様

出迎えに來た伊能三郎右衛門その他の者に荷物を深川宅に持たせ、忠敬と隊員はその足で暦局の高橋作左衛門の許へ廻り、道中で認めた巨細書一通を提出した。公儀を笠に威張つたとか賄賂を取込んだとかの風評は堪えがたい屈辱の思いであつたのであろう。

報告書は糸魚川での一件を最初から相済み落着まで詳細に説明しているが、内容は前記と重複するので省略してその後を読み続けることにする。

糸魚川町役人、梶屋敷役人一同に早速相済み忝けなく候旨挨拶に及び候。右の通り相済み候儀を相済まず候様、猶又重々の不届

きの儀は隠しおき、謂れ無き儀を御勘定所へ掛け候段、糸魚川町役人の悪心、同所陣屋不吟味と存じ奉り候。私儀も前文申し上げ候通り、御用先四ヶ年日夜心に掛け候儀も無益の様に存じ奉り候へば、此のたび糸魚川一件の儀、相成るべき儀に御座候はば御掛様か御勘定所へ仰せ立てられ下しおかれ候様願上げ奉り候。尤私当年迄四ヶ年相廻り候国郡村々の中へ、測量御用通行先、権柄又はがさつにこれあり候所、又は手輕に相慎み通行仕り候所、御札し下しおかれ候ても、恐れながら相分り申すべき儀と存じ奉り候。私儀も段々老年に罷り成り、当年国々海辺大難所には甚だ辛勞仕り候へば、此上遠国出役の儀おぼつかなく存じ奉り候。たとい相勤め候とも右糸魚川町役人の様なる御用にも差障り候不届きの筋は、利解をも申さず無言には差し置きがたき事に存じ奉り候。

(中略)

随身の者ども御用を権に、がさつ又は賄賂等の儀疑い候方もこれあるやの儀、御内意仰せ下され甚だ以て相違にて決してこれ無く候。がさつの儀は前文に申し上げ候通り朝暮教諭仕り、少しでも言語宣しからず候へば用捨これ無く相咎め候様に仕り候。又賄賂等の儀は御普請役又は御見分御役にても当時はこれ無き時節、況んや測量御用の事に御座候へば、第一に村々役人も一切に心付き申さず候所にこれあり候。殊に新規に抱え候奉公人はこれ無く、郡藏、秀藏、慶助儀はかねて御承知の者共。殊に年少の相馬村津大兄、板鼻宿小野良助兩人は実躰にて権柄等は決してこれ無く、身元相応に仕り候間、各用意金錢も持參仕り候。下人兩人も江戸抱にてはこれ無く、國者にて少しもがさつなるものには御座無く候。

此度の高翰拝見仕らせ候所、一同恐入り是まで御教訓に隨ひ、なるたけは相慎み候所、がさつ又は賄賂等外々疑心を請け候ては先祖、親類、知己に対し面目も御座なく候へば、相廻り候國々御札し下し置かれ候様御願下されしと一同申し候。若し相叶はず候はば此上測量御用御手伝の儀は御用捨下され候様一同申し候て、私儀も甚だ当惑難儀仕り候。何分にも御勘弁下しおかれ候様に願上げ奉り候。

伊能勘解由

報告書は以上で終っている。この一件は高橋作左衛門の書簡にあるように勘定所でも取上げることなく無事に納まつたのであろう。忠敬日記もこの先までの事を記していない。

(うすい りょうさく・「古文幻想」誌同人)

糸魚川＝新潟県南西部、姫川下流の市。もと松平氏の城下町。

姫川流域には十余の発電所があり、翡翠（ひすい）

石灰岩などの産地。（広辞苑）



伊能忠誨日記
(五)

佐久間達夫

文政五年(一八二二) 伊能忠誨一七才

正月大

朔日予、高橋侯、吉田、山路侯、御長屋等行く。根岸、源空寺、

二日 予、布施侯、及び右御用人、三宅、坂部、市野、渋川、門谷、

坂部、足立御親子入来

三
日 堀田侯、佐藤、林侯、桑原、柳屋、持田二ヶ所、山本、紙屋、其外近所へ行き昼時帰宅。又、大槻に行き帰宅。此昼、伯母、保木方へ手紙を遣す。先三十日、高橋侯より申し來たりし趣の通りに致し候ては、御屋敷へ対し甚だ当惑致し候。右の趣に致候ても宜しきや渡辺様に承可レ下由、保木に云う。故に

今、其返事を聞きに人を遣す。保木よりの返事渡辺云う。若、三郎右衛門様御屋敷へ熨斗目着用し、御出有レ之ば俗に云う、ツラアテ同様に相成候べき也。当十一日、服紗小袖にて罷出可レ宣の由也。保木、私意に相成哉之趣、御屋敷へ御口儀無レ之方可レ宣之由。内田、柳龜様同道帰る。岡田、根岸來たる。馬場、朝比奈來たる。三宅、桑原隆朝入来。桑原養純來たる。渋川侯来駕。浦野、渡辺犀輔、足立長篤入来。

四日馬場、朝比奈來たる。五日涉川侯來駕。浦野、予、書初めをする。

七日 予、御役所へ行き、衣、熨斗目上下に着替、節氣の推算初め、

予、御役所へ行き、衣、熨斗目上下に着替、節氣の推算初め、酒餅飯出る。七時頃帰宅。伯母、源空寺、及び高橋侯へ行く。

八日 今日御用初め。半治を呼び料理。画師北双口、未方に來たる。

八時頃退客。保木七時頃来たる。今夜予、足立へ行く。保木来たる、泊る。

一〇日 箱田帰る。

予、軍代屋敷御代官小田侯手代沢田へ行き、足立へ行く。佐原より江戸御住宅の内は御代官へ御年札可レ然由云来たる。まことに

一二日 伯母、茅町へ行く。灸する人来たりし故。

予 源空寺 足立へ行く

立春。桑原隆朝入来。予、江戸に居り佐原へ行く事いやに相成候節は如何致すと云う。紙屋内義、師妹來たる。伯母、両

人を呼び来たり馳走。

一五日 予、熨斗目上下にて御役所出勤。測太陽及び金星。七時前

帰宅。但し今日出勤者朝出也。

一六日 予、出勤。今日惣出勤也。予、御仲間入の餅菓子を出す。但

煮じぬ共四重 内二重を開く 細屋へ伯母行く

一七日 予出籠 飢菓子一重を開く

ノ日
予
神田御屋敷へ行く。例年の通り御料理頂戴し、右席にて
膳又^{くじ}、百石^{ひゃくせき}、十石^{じゅうせき}、一五石^{いっこう}一

ケ年。不當者は十一ヶ年日割返し候事。若し帶の候はば年

貢の内、引き取り可申事。年々本屋、壹兩ずつ稻荷様へ奉

納致し候故、当たり籜の御方壱両差し出し、十ヶ年に貳十両

にて普請可レ致由事。今日、ヌカリヤ、籤に当る。

一九日 紙屋新兵衛來たる

二十日 予出勤。足立左内、柴山に云う。但し東儀休み。三郎右衛門

儀、來年分の儀故、當分昼測量而已にて、夜測量致させ不レ申の由。

二一日 予、伯母灸すえに行く。今日留守故帰る。寺沢善藏來たる。

持田勝三郎、今日から來たる。今夜、松田、小川、山岸、渡辺の年始状を書く。

二二日 予出勤。柏木音右衛門來たる。

二三日 予、佐藤へ行く。昼時帰宅。

二四日 雪降る。予出勤。柏木音右衛門、昼時帰國の由。

二五日 予出勤。測_ニ圭表_一。

二八日 今朝、伯母、歩行にて灸すえに行く。

二九日 予、伯母、歩行にて灸すえに行く。岡田に借り御城之図を写す。大野弥三郎、下河辺、時計を持ち來たる。

閏正月 小

二一日 高橋侯折句開日也。今夜紙屋内義姉妹來たる。小谷半兵衛よ

り書状至來。右状中、出店三条通り西へ入る。右御用に付願被_レ下候。

三日 奥村喜三郎來たる。

五日 予出勤。東土川より半紙、扇子來たる。

六日 高橋侯折句開日也。今夜紙屋内義姉妹來たる。小谷半兵衛よ

り書状至來。右状中、出店三条通り西へ入る。右御用に付願被_レ下候。

七日 予出勤。佐藤へ行く。二階普請中故に休会。八日も休会。

八日 予出勤。足立重太郎伯母死去の由、故に朝の内、足立へ悔み

に行く。折句入り違いの儀は、足立左内に承るに御不承知故に止め。奥様、予帰りの節、予は召て明日四半時頃、伯母

様に屋根船にて御出被_レ成候様、御病氣御出相成可_レ申候はば、人を遣し候様。御役所へ上り候筈心積もり申す。

八日 予出勤。四半時過、伯母船にて高橋侯へ行く。其船に高橋侯

御夫婦、及び東儀、伯母等乗り御抱屋敷へ行く。柴山歩行にて次郎様、太郎様、柴山子息時次郎、下河辺子息を連れ、御抱屋敷へ行く。伯母五時頃帰宅。今夜、永沢半右衛門來たり、伯母留守故、明日來るとて帰る。

九日 今朝、永沢半右衛門來たる。昼出立に致し候由。

一一日 高橋侯御抱屋敷へ上げ侯燭台を買う。

一三日 伯母、高橋侯へ行く。又、源空寺へ行く。予源空寺へ行く。

一四日 御役所へ出勤。

一五日 予出勤。朝、予、灸すえに行く。伯母も又行く。

一六日 啓蟄。予、伯母、ハツ、リキ、紙屋新兵衛灸すえに行く。

一九日 伯母、ハツ等灸すえに行く。高橋侯御子息小太郎、今日急元服の由。永井云う。

一七日 予、伯母灸すえに行く。予出勤。伯母高橋侯へ行く。小太郎様御祝儀に金壱両進呈す。

一八日 予、灸すえに行く。直ちに出勤。伯母灸すえに行く。高橋小太郎を御呼び出しの御書付、先生御登城持ち帰る。

予、羽織袴にて渡辺犀輔へ行き、但し給金三十石に相成候に付、右祝儀金百疋進呈。高橋侯へ行く。服紗小袖上下にて小先生御待受く。但し先生同道。八時過御帰宅也。御酒は御帰宅前より出る。惣、酒、飯引く。七ツ半時頃也。予、六時頃帰宅。伯母は八時前高橋侯へ行き、五時前帰宅。

二二日 予出勤。伯母、桑原へ行く。

二三日 予、永井、桑原養純、箱田、サカエ町芝居に行く。夜ハツ時頃帰宅。竜ヶ崎丈右衛門大病故にセオ御屋敷御暇を願い、七日_の御暇にて昼八半時頃下がる。箱田泊る。

二十四日 今晩七時頃セオ出立。竜ヶ崎へ行く。半兵衛送り。予出勤。

今夜養純來たる。

二五日 予灸すえに行き、直ちに出勤。伯母も同道灸すえに行く。今夜半兵衛帰る。

二六日 伯母灸すえに行く。予、佐藤へ行く。

二七日 予、伯母灸すえに行く。

二八日 予灸すえに行く。直ちに出勤。吉田侯御子息見習被仰付候。

二九日 伯母も灸すえに行く。

二九日 予、伯母灸すえに行く。上野の伯母の妹來たる。即ち、上総屋の後家。

二月 大

朔日 春分。予出勤。朝四時頃柏木久兵衛登る。予紙屋へ行く。予、足立重太郎、東儀、伴等、吉田へ祝儀に行く。

二日 桑原、先隆朝（二代隆朝如宣）十三回忌故、伯母、桑原へ行く。松田セオ六時過帰る。紙屋内義來たる。伯母五時前帰宅。

三日 予出勤。先生、御書物奉行被仰付候。月日。芸者おトキ、高橋侯にて元服の由。セオ芝居に行く。

四日 八時頃、紙屋内義來たり。セオ同道御屋敷へ上がる。保木、足立へ弟子入り。紙屋伊助祝言。女房親元の縁を切り貰う。但し、女郎上がり也。

五日 予出勤。オランダ人着。すがや文作來たる。

六日 予、伯母灸すえに行く。予、佐藤へ行く。先生御老母死去の由故に休会。来月六日より発会。高橋侯折句開日。

九日 予、伯母灸すえに行く。今日、御用終わりより永井と校合。

儀象考成二冊。

一〇日 予出勤。予、伯母灸すえに行く。

一一日 予出勤。伯母灸すえに行く。御役所より下編火星一冊拝借。

一二日 伯母、紙屋へ行く。

一三日 伯母、高橋侯、及び源空寺へ行く。予出勤。引け後、源空寺へ行く。今朝、はつ風邪伏す。

一五日 予出勤。伯母、石場へ行く。但し灸すえ。

一七日 予出勤。予、伯母灸すえに行く。

一八日 予、伯母灸すえに行く。紙屋チセ同道。今夜ソノ来る。

一九日 予出勤。予、伯母灸すえに行く。紙屋チセ同道。今夜ソノ来る。

二〇日 予出勤。予、伯母灸すえに行く。紙屋内義同道。菅谷文作來る。

二一日 予、伯母灸すえに行く。松野茂右衛門入来。

二二日 予、五半時頃、高橋侯へ行き、小先生、今泉、坂部同道、石町長崎屋へ行く。紅毛人を見る。其前、大槻玄沢、宇田川玄真等來たるを相待居候處、不來故に久藏を宇田川へ遣す。間違いにて昼過の心得の由にて居しか、早々來たる。間もなく紅毛人を見る。予、直ちに帰宅。九半時也。

二三日 予出勤。帰路佐藤へ行く。渋川侯の伝言。赤坂田町三丁目川岸通り安田龍泰、祖父の宅を尋ねて御役所へ来る故に予対面す。又、拙宅へ上ると云う。高橋侯來駕。

二五日 予出勤。実は今日渡辺犀輔母死去。犀輔不レ帰内は、内にて内葬す。

二六日 安田龍泰來たる。曆学稽古仕り度由。

二七日 予、伯母灸すえに行く。予出勤。帰路足立へ行き、庚戌曆法拝借し帰る。曆法新書続録。

二九日 予出勤。予、伯母灸すえに行く。

三〇日 予出勤。折句冠出吟。但し高橋侯の御撰也。

一日 予出勤。予、上編を始める。

二日 石渡鐘太郎來たる。読書。

三日 伯母、源空寺、及び高橋侯へ歩行にて行き、暮頃帰宅。予出勤。引けより源空寺へ行き帰宅。大暑し。惑星儀御買上に成

朔日 予出勤。今夜御役所の者相残り居り候由。奥より云来たる。七半時頃より酒を出す、奥にて予、皆より早く飯すみ帰る。

五時前也。伯母、御玄関迄参り居る。今夜渡辺へ悔みに行く。

公方様、左大臣に、

右大将様、内府公に御転任。

御台様、及び御連中様も、

御台様、従二位。御連中様、従三位。

二日 予、神田渡辺屋輔御母死去葬送故、五半時過ぎ渡辺へ行く。

程なく御寺へ供して行く。同勢七十人ばかり。右すみ御役所へ行く。九ツ時也。御役所へ行きしは、今朝伯母、紙屋新兵衛、予、ソノ等同道、十軒店へ行く。雑の道具を買う。右の品を先生へ進上すべき故。又藏に右持たせて浅草へ遣す積もり故。予、御役所に行き、昼飯を食べ待ち居り候所不^レ来故、予、帰る時に道にて又藏と行き違い、予、又、浅草へ行くべき所、伯母も是非可^レ行間、今日高橋侯へ行く。五半時頃帰宅。今夕、小嶋典膳来駕。去月二七日着、八日出立の由。

三日 予、高橋侯、足立、桑原、近所へ礼に行く。保木來たる。箱田來たる。泊る。

六日 安田龍泰來たる。庚戌曆法を貸す。

八日 予、佐藤へ行く。下編図解成る。大野弥三郎來たる。

九日 予出勤。少し早仕舞にて足立へ行き、新法曆書統録推歩稽古。

一〇日 安田龍泰來たる。新法曆書統録を持參す。

一五日 予出勤。引きより足立へ行き、曆法新書、立成拝借。

一八日 紙屋内義來たる。永沢慶吉娘來たる。

一九日 永沢慶吉娘、元服に來たる。御屋敷へ御目見えに上がる。永沢治助來たる。清見屋來たる。

二〇日 予、永沢仁右衛門宅に行く。仁兵衛、治助泊まり居候故。予出勤。

二二日 久保木俊藏帰国。

二三日 予、伯母、折句開卷特見に行く。九時半より始まり七半時終る。二階連中、箱田、保木等行く。予、箱田先へ帰宅。箱田今夜泊る。伯母五ツ時前帰宅。

二六日 紙屋内義來たる。今夜、久兵衛姪下り来たり泊まる。

二七日 予出勤。今朝、惑星儀拝見。朝より久兵衛、同人姪、ソノ、所々見物に行き、五時前帰る。

二八日 今朝久兵衛、同人姪トラ女帰国。

二九日 予出勤。昨日、足立、根岸、今泉、御城へ上がり大坂出来の御目鏡、三重の御櫻にて見ためし致候由。

四月 小

朔日 予、永井、ソノ三人芝居へ行く。五時前帰宅。

三日 奥村喜三郎來たる。

四日 予出勤。曆法新書法、及び立成算測返上。

六日 予出勤。大野弥三郎來たる。

五月 小

七日 紙屋新兵衛來たる。

朔日 予出勤。今夕、リキ帰り來たる。高橋、足立、異国（アンガリヤ）船來たりしに付、浦賀へ罷越すべき内意あり。

八日 予出勤。安食の仙右衛門母來たる。神田佐久間町伊勢屋清兵衛方へ泊まり居る。

九日 予、新橋伊勢屋清兵衛宅へ行き、仙右衛門母泊まり居る故、予、伯母、ソノ、其外紙屋者等と船にて、真先迄行き、御屋敷へ行き、伊斐大明神へ参り、加西太岸跡にて料理座敷有り、此座にて入湯、飯等食べ、又船に乗り、深川八幡裏に付け八幡へ参り六時過帰宅。

一二日 伯母、桑原へ行く。

一三日 予、伯母、源空寺へ行く。伯母、高橋侯へ行く。予、渋川侯へ仏國曆象編を貸す。応元暦は高橋侯にあり。

一六日 予出勤。予、伯母、紙屋内義、灸すえに行く。

一八日 予、佐藤へ行く。句釈は論語に相成り候由。桑原養純来る。

一九日 予、佐藤へ行く。句釈は論語に相成り候由。桑原養純来る。

二一 日 今夜、リキ、曾我野船へ行く。嘉兵衛船にて上総へ行く。上総屋後家來たる。

二二日 渡辺啓次郎來たる。十七日着の由。紙屋内義來たる。

二四日 予出勤。キレ屋來たりし由。渡辺犀輔妻來たりし由。菅谷文治來たりし由。

二五日 予、金子十両、十二日迄の日切、渡辺犀輔妻へ貸す。

二六日 予出勤。箱田泊まる。高橋様おあずらいの釐^{ナシ}、度々來たりし故、今夜、内にて食す。

二七日 予、伯母、紙屋内義、灸すえに行く。

二九日 足立親子同道入来。

六日 保木來たり、久藏病氣用事等にて入^レ來。

五日 箱田來たる。予、高橋侯、足立、佐藤、桑原、近所に頼みに行く。四ツ時後帰宅。

三日 昨日、浦賀より便り有^レ之。何も苦勞なし。異国人から薪水を乞う而已。アンガリヤ人三十三人、病人出来候に付立ち寄る。異国人、魚漁の船也。能田立來□□鏡能く出来に付、金五両被^レ下之。

一日 予出勤。柏木久兵衛來たる。早朝也。

一五日 予出勤。伊能七左衛門來たる。七時頃也。紙屋内義來たる。

一七日 渡辺犀輔妻來たる。金子持參し返す。

予、今朝足立に行く時に重太郎、左内の出向に行くに逢い、予、先へ帰り支度、重太郎同道、糸川觀音前へ行く。御着にて間もなき由、酒飯等すみ馬場へも行く。馬場へ足立も向い逢う。休み二軒。予、重太郎へ口駕^{カニ}云付、予直に帰宅。半次來たり地をほる。

一九日 予出勤。明日より暑氣休みの由。皆々へ申し開かせ申そと

初め候に先生へ申し上げる。御承知。

二十七日 今夕七ツ時過、伯母、紙屋内義と持田勝三郎方へ呼ばれ行く。

月空より予の玄関前普請の事申し來たる故、東次郎を呼びに遣す。

二二日 予出勤。今朝、東次郎來たる。

二六日 久兵衛來たる。

二七日 予出勤。足立左内入來の由。土産持參。加納屋治兵衛星後着

の由。今朝、柏木音右衛門帰国。

二八日 家主儀八來たる。紙屋來たる。

六月 大

朔 日 予出勤。内より人來たる。柴山に拝借の藩翰譜十二冊、右人に持たせて内に返す。但し先日三冊借りる。合十五冊。

二 日 上野後家來たる。曆法新書、続録立成写し成る。先に本法写しとる。

四 日 予、ツギ上下にて山路、吉田、足立へ暑氣見舞、奥に出て衣替。出勤。高橋侯入來。

五 日 予、渋川侯、及び津田御屋敷、渡辺、中安、足立に行く。又、佐藤、桑原、石沢、米山、持田、其外近所に暑氣見舞。衣服前日の通り。

六 日 大野弥三郎來たる。渡辺啓次郎來たる。馬場左十郎入來。足立左内入來。

七 日 予、山田茂右衛門手代沢田、馬場左十郎へ暑氣見舞。出勤。先日より南部一ノ瀬村百姓にて百四十三老人、百三十九老女、

其外四夫婦そろいし由にて、此度日本橋の通り初めの由。専らの説にてヨミウリ等、所々に出て、百十三の老人、亀嶋迄

來たり、所々に行き候由。今朝出かけ紙屋玄七に逢う。玄七

云う。昨日、上田に其老人とられ候て入牢致し居り候由也。

佐原石屋三郎兵衛來たりし由。

渡辺啓次郎來たる。長崎に出役。今日、被仰付候由。紙屋

新兵衛來たる。大工東次郎來たる。

一〇日 予出勤。加納屋治兵衛帰国。星後、黒田藤吉來たる。

一一日 今夕、紙屋庄藏來たる。囲碁。

一二日 予、佐藤へ行く。一昨日、順助方へ唐紙持たせ上げ置き候へ

津宮先生よりの頼まれ候事故、順助云う。只今は仕事こみ候故、片づけ次第、私より差し出し、早々仕立候様仕べき由。

男子一昨日誕生の由にて十八日迄休会。

一五日 予、紙屋姉妹、及び持田勝助子息勝三郎等同道、銀座へ行き、祭り見物。朝四ツ頃帰宅。八時頃箱田來たる。奈良丸、手傷四ヶ所喧嘩けんかにておひ候由也。紙屋庄藏來たり囲碁。

一六日 予出勤。渋江様御男子十三日出生の由。

一七日 上總屋才カツ來たる。

一八日 渡辺啓次郎來たる。足立重太郎入來。

二〇日 飯高政四郎來たる。今夕、久保木俊藏より書状付長後舉石ズ

リ下六枚來たる。先達而、二階の衆所望に付、云い遣す。

二一日 渡辺啓次郎來たる。八線表を借りる約束す。飯高惣兵衛來たる。斎藤四郎右衛門來たる。柳屋龟松、今日より唐詩選素読

初める。

二二日 予出勤。三宅八郎右衛門來たる由。紙屋内義來たる。渡辺啓

次郎より遣いの者、八位八線表持ち來たる。

二三日 予、佐藤、林講に行く。

二六日 東金茂右衛門娘、上野より來たる。上総の女イシ、今日來た

る。吉川方へ奉公の所気に入らず故、来月迄置く。来月十五

日頃迄、預かり置く約束。

二七日 今朝、紙屋内義來たる。

三〇日 足立長雋來たる。渡辺啓次郎來たる。

七月 小

二日 弥三郎來たる。大閑になり候朝顔持參。

三日 紙屋新兵衛内義妹來たる。朝顔見に来る。

四日 予出勤。長嶋加兵衛、忠吉、富士山及び大山より帰る。

五日 長嶋加兵衛、今朝帰国。

六日 今朝、保木來たり、旦那大病の由。実は死去。故に予、渡辺へ行く。看代持參。中安へより帰る。病氣見舞也。

七日 予、早朝、佐藤、桑原へ行き出勤。九ツ時過先生より勝手に引き候様被仰。囲碁。七ツ時頃帰宅。今星、忠吉帰国。

八日 永沢仁兵衛來たる。此間、関東取締より本谷新左衛門に來る可き由。然るに此事、佐原にて芝居致し候處、取締の下人來たり候故、内々にしてと金をやる。此事あらわれて本屋入牢にてもなるべきの由。故に永沢仁兵衛、此事、及び本屋との出入りを兼ねて登り候也。本屋の事は相すみ候。

一日 今夜、紙屋内義來たる。

一二日 今朝、箱田來たり、朔日養子の儀決まり、組頭へ逢いし由。

一五日 渡辺啓次郎來たる。

一三日 朝七半時頃、伯母、予、源空寺へ行く。伯母帰宅。予出勤。

一六日 今日、飯炊き与七暇遣わす。

一七日 上野上総屋おカツ來たり、東金茂右衛門娘タミを連れ帰る。

二十日頃、上総へ出立の由。今夕、佐原の肴屋夢八の子來たる。當時、水戸の医者の家に居る由。

一八日 内田弥治馬來たる。上野よりタミの荷物をとりに人をよこす。八時頃より狼煙上がる。夕、足立重太郎、石坂六兵衛同道來たる。一階に上がり狼煙見物。酒、ソバ等出し四半時頃帰る。

伯母、重太郎ハリをして貰う。又來たる約束す。渡辺啓次郎来る。

一九日 予出勤。半兵衛帰り來たる。帰り重太郎同道帰る。ハリを伯母ねがう。

二〇日 大いに涼し。拾に襦袢を着る。今朝、桑原養純來たる。築田の相撲へ行く由にて、予を誘いに來たる。予不^レ行。九半時頃より狼煙上がる事、今夜は不^レ上。

二二日 予出勤。帰り重太郎同道帰る。明日、おカツ、おタミ出立の由。上野の人來たり云う。

二三日 昼頃、足立重太郎入來。予、佐藤へ行く、林講。先生御書出來る。渡辺啓次郎來たる。暇^レえ。長崎表へ行く。出立は明日の由。

二四日 予出勤。足立、馬場御城へ被^レ召御褒美。浦賀へ行きし故。馬場病により御礼廻り無^レ之帰る。前より口^ウ通りの由。七ツ半時、足立帰る故、予、足立、馬場へ祝儀に行く。

二五日 紙屋新兵衛來たる。足立重太郎入來、泊まる。山本來たる。淺草無尽。久保木に頼まれし佐藤の書、久保木へ遣す。

二六日 朝、足立重太郎帰る。山本來たる。伯母、足立長雋へ行く。

夕、予、桑原に行くも養純留守故帰る。

二七日 四半時頃、馬場左十郎死去。予出勤。今夜伯母、桑原へ行く。

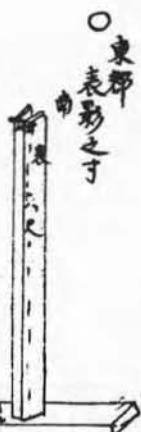
二八日 予出勤。山本來たる。今夜、馬場内葬の由。

(つづく)

○伊能忠誨自筆の「東都表影之寸」

伊能忠敬記念館蔵

東都表影之寸の



芒種	夏至	小滿	立夏	穀雨	清明	春分	啓蟄	雨水	立春	大寒	小寒	冬至
小暑	大暑	立秋	處暑	白露	秋分	霜降	立冬	大雪	小雪	大雪	九尺七寸二分	一丈〇〇五分
一尺四寸	一尺三寸	一尺六寸七分	二尺七寸	三尺四寸三分	四尺三寸一分	五尺六寸九分	六尺四寸七分	七尺六寸	八尺八寸五分	九尺七寸	九尺七寸二分	一丈〇〇五分
芒種	夏至	小滿	立夏	穀雨	清明	春分	啓蟄	雨水	立春	大寒	小寒	冬至

○
先触

伊能三郎右衛門差出の文書

伊能淳氏藏

淳氏藏

先触

高橋作左衛門手附手伝

伊能三郎右衛門

忠誨が、江戸で長さ六尺の表（ノーモン）を立てて、二十四気の太陽南中の影の長さを測定した記録。

芒種亦暑

立夏立秋 一尺一寸八
小滿 大暑 一尺六寸七分
夏至 一尺寸

啓鑿寒露土尺三寸分
春分秋分四尺三寸分
清明白露三尺四寸三分

大寒小雪八尺余立春立冬七尺六寸九分雨水霜降六尺四寸七分

卷之三

卷之三

東都
表影之子

覚

先觸

吉高馬御用事
伊能三郎

之

一 情處

右秋成後賀儀音佐多行

か之威國御泊酒百經因物

江戸龜島町測量御用所江

在御の如き御室をはる候

高知馬御用事御手付

江戸港御測量御用所江

在御の如き御室をはる候

周々集散立宿御手付

御手付御室をはる候

九月九日

先觸
伊能三郎

九月九日

高橋作左衛門手附手伝

伊能三郎右衛門

成田より

酒々井

白井

大和田

舟橋

行徳

右村々宿々

注釈

軽尻馬

(『日本史用語辞典』柏書房発行参照)

人が乗つて荷をつけない馬。但し、蒲団、中敷、小付のほか

五貫目までの手荷物の携行はできる。

右者、我等儀、明後十一日、佐原村
出立、成田村泊、同十二日朝、同村より

江戸龜島町測量御用所江

罷越候間、御定之沈貲錢請取二之、
書面之馬、無レ滞繼立可レ被レ申候。尤、
行徳より乗舟之積り船壳艘
用立可レ被レ致、止宿之儀者、着之
砌、可ニ申談候以上

三六日で世界一周－世界を歩こう 第二話

渡辺一郎

ル周辺は旅行客狙いの危険地帯である。

そのうち、コパカバーナ海岸に出たかなと思つたら、横断歩道の手前に止まり、目の前の大ホテルを指差してこのホテルだという。心配は解決した。そこに停留所があるわけではないから、それなりに考えてくれていたのである。車掌と手を振つて別れた。

リオデジャネイロ イグアスの滝をおわって、リオデジャネイロにもどる。帰りは馴れたもので、公園バスの時間を調べ、昼過ぎにバスセンターに向かう。バスセンターで、空港経由イグアス・ダウンタウンゆき赤バスに乗つて空港着。といつても客は我々二人だけ。乗務員はドライバーと料金係の二名。料金は一人一・一レアル（約五五円）。全く申し訳ない気持ちだつた。飛行機はサンパウロ経由だつた。航空周遊券はトランジットなら同じ空港に寄つてもいいということである。

パリグブラジル航空七六七一三〇〇のビジネスクラスは一二席。乗客は我々を含め三人、まことに快適だつた。夕方、リオデジャネイロに着く。

次はアルゼンチンなので、国際線のチエクイン・カウンターの状況を調べてからシティバスで、コパカバーナのメリディアンホテルに向かう。二〇時三〇分頃だつた。暗くなつたのでタクシーにしようと思つたのだが、貞子は目の前にバスがいるじゃない、というので、メリディアン・コパカバーナOKか、と聞いて乗り込む。料金は一人二〇〇円。夜の街を飛びす飛ばす、猛スピードで突つ走る。恐ろしいほどだ。

周囲は見えないし、停留所もわからなくて心配なので、貞子にホテルの名前を車掌（乗務した車掌は、切符を売つたはじめの人ではなかつた）に伝えさせる。OKとのことだつたが、夜の街で、ホテルから離れたところに降ろされるといやだなと思つていた。何しろ夜のホテ



コルコバードの丘のキリスト像

半日バスは、リオの山手地帯を一周し、登山電車でコルコバードの丘に送つてくれる。

そこからキリスト像まで急な坂道を歩く。頂上は大満員、写真がうまく撮れないとばかりだ。あらゆる人種がわいわいがやがやと雜踏する。そのあとコパカバーナ海

のだが、それでもアキレタお話しである。大分儲けた気分になる。そして、すぐホテルで明日の半日観光（英語バスなので、説明はあるにしない。観察と憶測で間に合わせる積り）を予約する。一人三〇〇円。この場所では安くない。ここで稼がれているのだろう。

岸に降りた。

キリスト像のところから下界を望めば邪魔はない。写真の通りの風景で絶景だった。よくまあこういう展望台を作ったものだと感心する。イスの登山ケーブル建設と比べれば、何ということはないだろうが、考えたものである。確かに町のランドマークになつていいのだから。

翌日はメトロ（地下鉄）でダントンタウンを散策する。地図を持つて歩けば格好が悪いが失敗はない。ただ、襲われない用心が必要だ。

カンデラリア教会 一八一一年創建、内部装飾天井画が見事。

国立博物館 元ロイヤルアミリーの館 古代魚の標本、

巨大隕石2個（1個は五・三六トン）やクロノメーターがあつた。

国立歴史博物館 白亜の大建造物 ブラジル発見から共和国までの五百年間の歴史を展示。



国立博物館にあったクロノメーター（経線儀）、要するにゼンマイ時計。
これがなかったため忠敬さんは苦労した。

いうと、ノープロブレムだと、ロビーにスナックを用意してくれた。タクシーは白タクを五五レアル（二七五〇円）で世話をあつた。チップはU.S.五ドル。色々な商売があつて面白い。みな連携して稼いでいる。

ブエノス空港のタクシーで失敗 ブエノスアイレスは空港を出ると、

タクシーカウンターとフリータクシーの激しい客引き合戦だった。客引きのフリードライバーは、用があるからタクシーは要らないといつても離れない。エアラインに確認することがあるといつたら、出発ゾーンまで付いてきた。チリ航空を探し、行列してチリとペルーに向かうチケットのリコンファームを済ませる。それではとタクシー乗り場に向かうと、前の客引きがまた出てきた。正式なタクシーはカウンタがあつて、タクシー券を売っているのだが、ダントンタウンまで五〇ペソ、1ペソ三五円として一七五〇円くらいである。

この客引きはタクシーのライセンスを見せて三〇ペソだという。うるさくなってきたので、OKといって乗ることにした。するとタクシ一乗り場ではなく、一般駐車場に停めてあつた車に案内する。車はタクシーの車体だった。どうも空港営業権のないタクシーらしい。多少問題だが乗つてしまつたので仕方がない。隣にも同じ会社の客がいた。走り出すと、高速代が必要だという。始まつたなと思う。これで四〇ペソになつてしまつた。

そのあとで、さらに変なことが起つた。シェラトンホテルに行つてくれと話しているのに、全然違う安ホテルの前に停めて、ここから先是混んでいる。このホテルではどうかとの話。ホテルに客を売ろうというのである。飛んでもないことだ。

「いや駄目だ。シェラトンに金を払つてある。行けないなら、ここで

ブエノスアイレスへとホテルを早立ち アルゼンチンのブエノスアイレスに向かうフライトは早立ちだった。ホテルを五・三〇に出たいと

降りる」と言い切つて降りようとした。するとしぶしぶ、フロリダ通り近くのシエラトンホテルに向かう。

降りるときになつて、今度はチップを要求された。外国でタクシーにも多く乗つたが、要求されたのは初めてである。黙つて四五ペソ渡して、無言で降りた。白タク氏は、ほつとしたようだつた。もめたので支払いを心配したが、チップももらえてよかつたということだつたのだろう。トンでもないタクシー経験だつた。空港では高くてもその土地のルールに従つたほうがいいらしい。

アルゼンチンへの想い 私はアルゼンチンには特別な想いがある。若い頃、高度成長前のNTT計画局で日本の電話網の長期計画を担当していたとき、基礎となる日本社会の成長目標は、経済規模をアルゼンチン程度まで発展させたいということだった。今になつてみるとお笑いだが、視察にいつた元上司から「渡辺君『わらじ』みたいに大きなステーキが出てくるんだけど、上等なので、そんな大きなを食べても、全然腹にもたれないんだよ、そして安いんだ」と紙切れみたいて薄く伸ばしたトンカツを社員食堂で食べながら、楽園話を聞かされたことをしつかり覚えている。アルゼンチン経済が破綻してデホルト騒ぎがあり、大変な状態にあることはよく承知しているが、過去の余光なりがあるのでないかという思いが強かつた。

ところが、その想いは市街に入った途端に雲散霧消した。豪勢な公共建築物はくすんで、薄汚れていた。市街は一様にうらぶれており、中央駅など建物だけがいたずらに大きいが見る影がなかつた。地下鉄は新旧あり、新路線はまづまづだが、一番古い路線は木造車両で、車体がミシミシするシロモノで、よく走るなという感じだつた。経済が破綻するとは、こういう風になるのかと実感した。

フロリダ通り プエノスアイレスの銀座通りのようなもの。両側に高級品の商店が並び、ここばかりはあまり不景気な様相をしていない。ただレストランは少なかつた。1軒だけショッピングモールの地下に気楽な食堂街があつてバンドも入つていた。

近くにホテルで聞いた「オノ」という寿司屋があつたので入つてみた。日本人はいなくて、地元の人が寿司、てんぷら、中華、アルゼンチン料理をやつていて。客は二〇人くらい、ウエイトレス一人で走りまわつていた。

魚はサーモンとカジキマグロしかないから単調である。名前は忘れたが一皿頼んだら、刺身、巻き寿司など山ほど出てきて、食べ切れなかつた。種はよかつた。約一七〇〇円だから高くはない。
折角アルゼンチンにきたのだからと、「アルゼンチン・タンゴのタバ」という催しにも参加した。



フロリダ通り



日本移民汗の碑

EL Querandi という店で、一一・〇〇から一四・〇〇、送迎込み一人三三〇〇円だった。いってみると、会場はデナー付きタンゴショウで、小さい舞台があり、そこで数人が踊るという観光客相手のレスランショウだった。少しガッカリした。値段のレベルが分からなかつたが、シェラトンがいいと言うのだから、もう少しましだとおもつたが、これではツアーカー客と同じである。

実際に、参加者はほとんど団体だった。個人客は五、六人で日本人は我々二人だけだった。肝心のタンゴは踊り子兼歌手が数人、それなりに頑張っていた。やはり本場は本場である。

市街散歩 大聖堂、国會議事堂（エラクくすんで、精彩がなかつた。國が力を失うとはこういうことかと思つた）大統領府、サルミエント大統領号博物館（帆船）などを見学した。

日本庭園がダウンタウンから約二キロ北にあるのでバスでゆく。かなり広い本格的な日本庭園で、入り口に菊の紋章がある。「日本移民汗の碑」があつて、今上天皇は、皇太子時代に妃殿下と訪問されている。高円宮、秋篠宮の記念碑もある。園内に立派な日本食堂があつた。

いらしゃい。地下5mであるとのことだった。

レコレータ墓地 踊り子から女優、大統領夫人となつたエビータの墓を訪ねる。洋式墓地は芝生だとばかり思つていたが、ここではお墓の一つ一つが間口3~5mの小さな石造の家だった。地下室もあり幾つものお棺が引き出し状の棚に安置されている。高さも人の背より遥かに高いから丁度市街を歩いているような感じである。

エビータは有名人なのでガードマンに聞いたら案内してくれた。生花の輪がたくさん飾られていて、扉に花を差してゆく人も多い。墓の大きさは普通で、特別に立派ということではなかつたが、花は絶えな

ブエノスアイレスからチリへ（六月三〇日） チリとペルーはどうしても一筆書きの航空路に入れることが出来なかつたので別途エコノミー券を求めて、ブエノスから、ランチリ航空でサンチャゴへ向かう。機



レコレータ墓地のエビータのお墓

材はA三〇〇シリーズの新鋭機、サンチャゴ空港は近代的な新しい空港ビルであった。

インターネットで探したホテル・サンフランシスコはダウンタウンの便利な場所で一四〇ドル。値段は手頃だが、部屋がデラックスなのには驚いた。約四〇平米、廊下の突き当たりのドアの、また奥のクラシックな内装の部屋だった。スーパーと日本レストランを聞く。

ここまで来て、日本レストランを聞くほうがおかしいのだが、食事制限があるので仕方がない。付近を散歩のあと訪ねてみたが、やつていなかった。やむを得ずホテルで食事。

翌日は町を歩いていて、ホテルで聞いたのとは違う日本レストランを見つけて入る。主人は日本人だったが、お客に日本人はいなかった。日本人相手ではない日本レストランなのである。頑張ってはいるが、拍手したい気持ちだった。寿司は新鮮でおいしかった。でも魚は白身魚とサーモンの二種類しかない。チリでもマグロがとれるではないか、と聞いてみたら獲れるけれど我々には高くて手がでないという。

チリ人相手では無理だとということらしい。食事のあと、明日の朝のため、巻物を握ってもらって帰る。

ホテルのフロントで、こういう日本レストランを探してきたぞ。なかなか良かつた。知つてゐるか。と聞いたら知らないという。それでは、すぐ近い。覚えておいたらと、場所と名前を教えてあげた。

サンチャゴ観光第一日（七月一日）

サンフランシスコ教会 飾りはないが、光の技術により莊厳な雰囲気を演出。壁は塗放し。

サンタルシアの丘 市内中央にある昔の砦。登りはキツイが頂上からは市街一望。



サンチャゴの大聖堂



衛兵将校に写真を撮らせてくれといつたら
真ん中に入ってくれた。敬礼！大統領府にて

大聖堂 内部は華麗。入り口に制服りりしい美男、美女の騎馬警官

が馬上で並んで侍立している。愛想がいい。内部ではミサをおこなっていた。ミサ中、南米建国の父 オ・セ・デ・サンマルティン將軍の柩の前に衛兵が立つ。ミサをおわると隊伍を組んで引き揚げた。

中央郵便局 局で手紙を書いている人が多い。入り口の前に封筒

売りが店を開いている。色々な形の封筒を売る。絵葉書は局の内部で売る。

市庁舎 小さい。この規模で行政が順調に進むならない組織。中央

の光庭には各地の橋の模型を並べている、税金の使途の説明か。

大統領府 軍隊が警備。セキュリティーエックがあるが、中庭を通り抜け可能。将校と記念写真。

中央駅 地下鉄で移動。盛り場になつていて。食事。

サンクリストバルの丘 さびしい場所なのでやめた。

サンチャゴ観光第二日（七月二日）

博物館巡り 体調不良につき、博物館を歩く。コロニアル博物館、

サンチャゴ博物館、国立博物館。

国會議事堂の庭園散歩

食事 前に紹介したすし屋で食事。てんぶら七〇〇円、寿司一〇〇円、お酒（お鉢子）四〇〇円。庶民的だ。

サンチャゴからリマへ（七月三日）ペルーのリマに移動する。空港に降りて驚いた。空港ビルは木造平屋建ではないか。中央にタワーだけが突出している。

ミニバスでホテルに向かったが途中の町並みはあきれるほどに貧しい。植民地時代の立派な建物もくたびれ果ててくすんでいる。新しい権力者は植民地より民の暮らしを樂にできないということのようである。あきれた話。

そして勢力争いをしている。

ホテルはシェラトンで、九五U.S.ドル。外観は堂々たる高層ホテルだが、客は少なかつた。ガイドは一時間一〇ドル。ホテルに日本語が少しづかるタクシーがいて、四時間四〇U.S.ドルで依頼した。案内なしでは昼でも心細い雰囲気だった。



リマのシェラトンホテルの部屋から

忠敬談話室だより

○歓迎！新会員 昨年度の新入会員の皆様をご紹介いたします。

石橋 輝樹さん 新潟県新潟市 新潟県庁O.B.、土木地質

大伊 信雄さん 東京都武蔵野市 障害児教育

加藤 忠久さん 愛知県岡崎市 （忠敬の人物像に関心）

神戸 利行さん 兵庫県加東郡滝野町 小学校教諭

杉浦 守邦さん 滋賀県大津市 山形大学名誉教授、医博

藤江裕美子さん 大阪府吹田市 フランス語通訳

山下 浩司さん 福岡県春日市 保険代理店会社役員

なお、新年度の会員名簿は次号でお送りいたします。

変更事項がありましたら、ご一報をお待ちします。

○お便り 堀江敏夫さん（苫小牧市）から

勇払千人同心像は勇払会所在住の人王子千人同心組頭見習河西祐助夫妻をモデルにしておりますが、原半左衛門とは別隊（三ヶ月遅れ）の三組（いずれも組頭格で家族同伴）で幕府派遣役人として蝦夷地に来ております。測量日記の勇払の条には在住河西祐助のことは出ておりませんので、まだ勇払に赴任していなかつたと考えられます。当時は松前・箱館地区を除き、妻子同伴は認められず、河西ら三組が最初でした。もし、勇払会所に役人の妻子がいるとしたら、珍しい出来事でしたから、忠敬も日誌に当然触れていたと考えます。

○お知らせ

□前号の33頁菅茶山詩の漢詩の部、七行目『奚囊我亦收河收』の収を岳に訂正いたします。菅波さんからです。

（つづく）

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64 頁

第37号締切 5月末 発行 7月

②例会・見学会の開催

第38号締切 8月末 発行 10月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第39号締切 11月末 発行 1月

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一萬円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバツクナンバーをすべてお送りします。

送金先

〒162-10822

東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座

○○一五〇一六一〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2~8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、パソコンなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用しています。タイトルは五行分、写真、図表(返却します)は大きさを考慮して下さい。

予定

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。
<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書齋、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

編集後記

◇事務所近隣では桜から白と淡桃色の花みずきに移りました。街路樹によく見かけます。花みずきはワシントンに贈った桜のお礼として日本に来たようです。◇昨年伊能図展が行われた東京国立博物館は別名「ユリノ木の博物館」。庭に大きなユリノ木があり、紅葉がきれいでしたが今は新緑。これも見事です。明治のはじめに渡來した30粒の種子から育つたものだそうです。◇エベル博士の挨拶から国と国との交流には大事な橋渡し役がいると感じた次第です。イラクに渡る種子は。◇新年度会費を振り込んでいただきました。「会報を眺め何ものかを感じてくれる人がこれほどいるとはスバラシイことだ」渡辺代表のつぶやきが聞えました。◇本誌の発行が予定より遅れぎみです。64頁建を継続いたしました是非幅広く投稿をお待ちしています。みなさまの会報です。◇日本ウォーキング協会では「日中友好ウォーク」二〇〇七年で「瀋陽、長春、ハルビン」の計画。望老師再会盛大宴!?(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.36 2004



HOT NEWS

- Inoh Map is International Mutual Comprehend
- This year action plan
- "Exhibition of Large-scale Inoh Maps in U.S" Opens!
- Topics from News Papers
- These are the 207 sheets of Large-scale Inoh Maps!

TOPICS

- Introduce Tadatakan with Suwahiri Language
- If It Came True —— Itoh Shinichi and Tadataka
- Compose a Poem about Tadataka (1)
- Tadataka's Medicines for his Chronic Disease
- Exhibition Inoh Collection
- TV Topics in Inoh Map

FROM VISITORS' RESISTERS

- Think of Inoh Tadataka's Great Achievement

MATERIALS

- Reading Documents in "Seimonkinkyorioku"(3)
- A Ranking List of Classical Japanese
- Introduction of Valuable Letter in Tadataka (1)

Non Open Tadataka Letter

REGEONAL MATERIALS

- Circumstances of Itoigawa Affair
- Inho Tadanori Diary (5)

ESSEY

- 36Days World Around Trip (2)

MEETING ROOM

John R Hebert	1
Watanabe Ichiro	3
Editorial Department	4
	5
	6
Watanabe Kenzou	11
Takeda Takeshi	14
Inoh Hiroshi	25
Sakuma Tatuo	29
Inoh Memorial Museum	41
	42
Inoh Yoko	30
Myoi Kyusuke	31
Kojima Kazuhito	16
Itoh Eiko	20
Andoh Yukiko	26
Y.Inoh Itoh Ando Watanabe	36
Usui Ryosaku	43
Sakuma Tatuo	50
Watanabe Ichiro	59
Editorial Department	64

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY